とも考えるにシゴト

what we feel, what we think, what we do

ともに考えるシゴト

what we feel, what we think, what we do

Introduction

「仕事とは何か？」
この問いにどう答えますか。

お金を稼ぐ手段、自己実現、義務、社会への貢献……。
人によってさまざまな捉え方があるでしょう。

この世界にはいろいろな仕事があります。
そしてその仕事を担っている多くの人がいます。

社会から注目されたり、評価されたりすることはなくても
一つ一つの仕事は大切なものであり、それぞれに意義がある。
与えられた仕事をただこなすのではなく
知識や経験を生かして自分なりに考え
誠実に取り組むことでさらに仕事は面白くなる。
そんなメッセージをこの本に込めました。

仕事といかに向き合い、人生の時間をどう使っていくのか。
それは私たちにとって大きなテーマです。

仕事への考え方や心のあり方次第で
人生を明るく、前向きにすることができます。
誇りを持って取り組める仕事と出合うことで
人生はより有意義で、豊かなものになるでしょう。
働く喜びや幸せを感じられる人生であれば
周りの人たちもきっと幸せにできるはずです。

この本に登場する皆さんは、
さまざまな分野の第一線で活躍されている方ばかりです。
そういう人たちにも挫折や苦悩があり、
そして仕事への尽きない情熱や探究心がある。
この本が、さまざまな人の仕事に触れ、
未来への手がかりを探す一助となることを願っています。

どんな時代にあっても
希望と生きがいを持って人生を歩めるように。
あなたの携わる仕事が
笑顔のある未来へと導いてくれることを信じて。

Contents

木とともに快適を考える ―― 4
器とともに暮らしを考える ―― 8
風土や生産者とともに食を考える ―― 12
若者たちとともに未来を考える ―― 16
文化とともにまちの未来を考える ―― 20
景観とともにまちづくりを考える ―― 24
人々の暮らしとともに建築を考える ―― 29
動物とともに環境を考える ―― 33
星とともに宇宙や時間を考える ―― 38

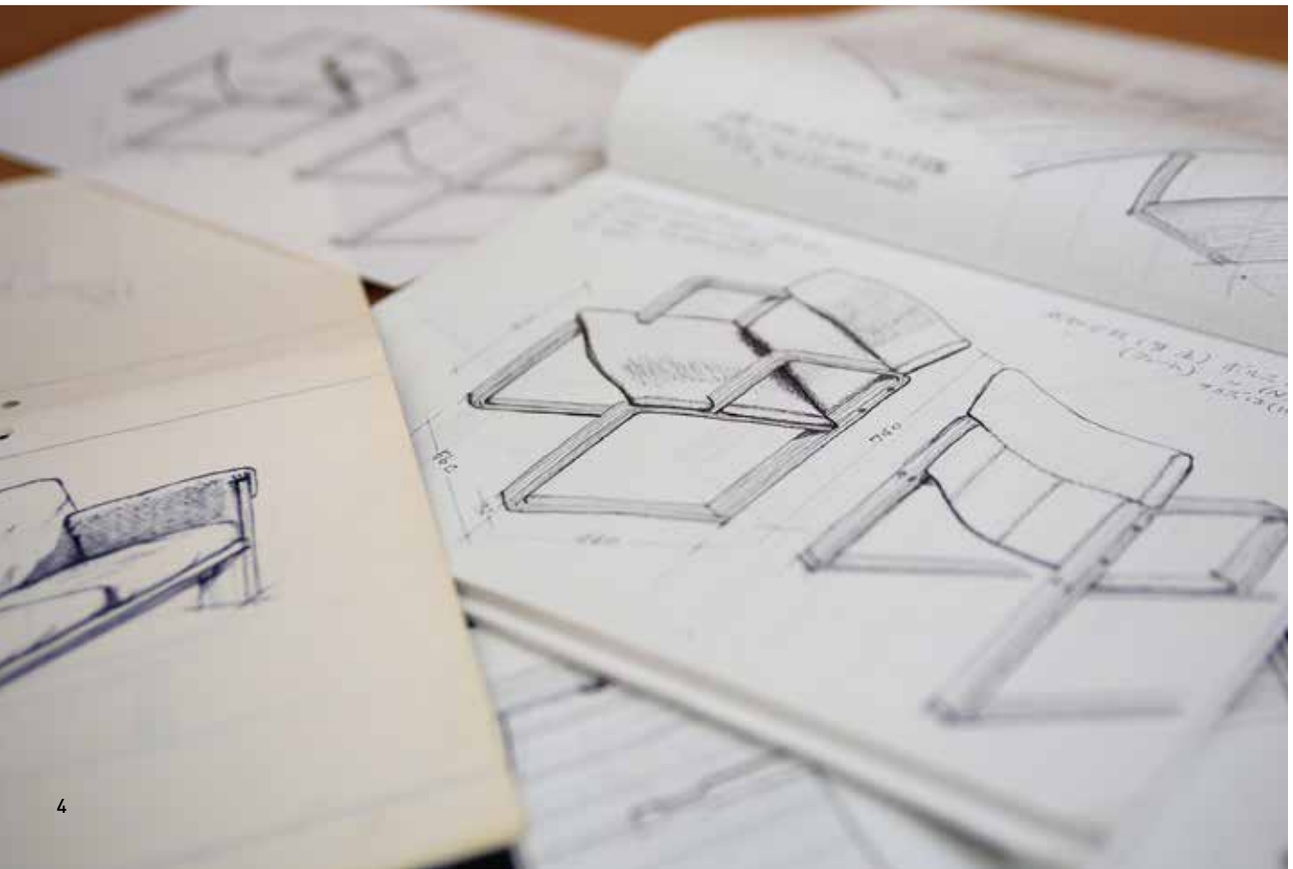
継承されるデザインスピリッツ ―― 7
Architects×Potters@大雪窯 ―― 11
都市の「顔」としてのガーデンをつくるということ ―― 26
野生生物の聖地東アフリカへの視察旅行 ―― 32
ボルネオへの恩返しプロジェクト ―― 37
ことばを伝える。思いを文字にする。
「文章を書く」仕事について考える。 ―― 42

この本に登場した建築＜IA研究所の建築＞ ―― 44
歴代代表紹介 ―― 45
IA研究所の作品（1986-2017） ―― 46

Visions　beyond existing concepts
未来像 — 既存の概念を超えて ―― 48

「木とともに快適を考える」

株式会社カンディハウス創業者
長原 實氏　1935-2015



デザインへの思いと不断のクラフトマンシップ

多様なデザイン性を持つ、椅子やテーブルといった西洋スタイルの家具。今では当たり前のように生活空間に溶け込み、暮らしに欠かすことのできない要素となっている。

たんすなどの日本的な家具づくりが主流だった1960年代の旭川で、家具のデザイン性にいち早く着目し、ヨーロッパ的な家具づくりに取り組んだ職人がいる。日本だけでなく世界からも高い評価を受ける家具メーカー「カンディハウス」の創業者であり、生涯を家具づくりと旭川家具の発展に捧げた長原實氏だ。

家具職人を目指していた長原氏は、10代で家具のデザインという概念に出合い、西洋家具への憧れを募らせていった。念願がかない28歳のときに技術研修生としてドイツに留学。3年半にわたって家具づくりの技術を学ぶと同時に、ヨーロッパの先進的なデザインの考え方やクラフトマンシップに大きな刺激を受けたという。

1968年に「インテリアセンター」（カンディハウスの前身）を立ち上げた長原氏は、地場のミズナラ材を使い、ヨーロッパ的なデザイン家具づくりに取り組んだ。当時はたんすや本棚といった箱もの家具が主流を占め、椅子やテーブルなどの脚もの家具は異色だった時代。しかし「旭川から世界に通用するデザイン家具を」という信念を曲げることなく、自身が理想とする家具を追い求めた。

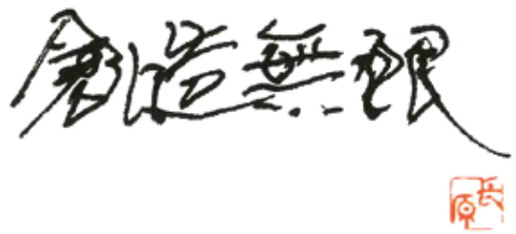
暮らしに潤いをもたらし快適な空間を創造する家具を

家具は暮らしの中にあり、毎日使うもの。そのため長原氏は、飽きのこないタイムレスなデザインを最も重視していた。そこに美しさや機能性、個性や創造性という要素を加えることで室内空間にデザイン性を与え、暮らしに潤いをもたらすような家具づくりを理想としていた。

そんな長原氏にとって、原点であり一生のテーマでもあったのが「椅子」だった。形状や素材の多様性、生活と密接した身近さ、長く使える耐久性、機能性や快適性といった工学的な要素、そして何よりも座り心地が良いこと……。海外の椅子のデザイン性に魅了された青年期。その時に抱いた「いつか自分もこんな椅子をつくりたい」という情熱をいつまでも失うことはなかった。

椅子が一脚あるだけで生活空間が豊かになる、心地よい暮らしを創造できる。そんな家具づくりを追い求めた長原氏は、やがて「ものづくり」から「空間づくり」を掲げるようになる。家具とともに快適に暮らす生活空間をイメージし、新たなライフスタイルを提唱していった。

世界に通用するには、個性やデザイン性をより鮮明にした家具づくりが必要だと気づいた長原氏は、優れたデザイナーたちとのコラボレーションにも踏み切る。家具づくりの世界では画期的だったこの取り組みは、今もカンディハウスの斬新かつ洗練されたプロダクトを生み出す源泉となっている。



長原氏がデザインした「ボルス」シリーズ。1980年代に誕生し、今もなお愛されるロングセラー

木を育むこと、人を育てること
未来を創造する家具づくり

北海道では、家具づくりに適したミズナラを中心に、広葉樹の伐採が長く続けられていた。その大切な木を育む森林が失われつつあることを知った長原氏は、林を買い取り、ミズナラを復活させるための植樹に取り組み始める。

100年かけて育ってきた木を使う以上は、その一本一本を生かし、100年もの間使えるような家具をつくろう。木の成長と家具のサイクルを揃えることが、森林の循環を守ることにつながると考え、頑丈でメンテナンスが可能な、長寿命の家具づくりに力を注いだ。そうした活動や理念は旭川家具業界にも広がり、賛同するメーカーが増えていった。

「ものづくりは人づくり」が口ぐせだった長原氏は、次代を担う若い人材の育成にも情熱を傾けた。「人を磨かなければ、地域も磨かれない」。そんな思いに突き動かされるように、「公立ものづくり大学」の設立を目指す市民の会を立ち上げ、精力的に活動した。また、晩年には家具デザイナーのスチウレ・エング氏との共同寄附で、「人づくり一本木基金」を創設。若い「ものづくり人」を支援するという願いを実現した。

長原氏が志したのは、長く愛着を持って使い続けてもらえる、機能的で快適な家具をつくること。木の個性を生かし、熟練の職人による細やかな手仕事が施されて、カンディハウスの美しい家具たちは生み出される。世界で愛される家具づくりの現場には、木に敬意を払い、ものづくりに誇りを持ち続けた長原氏の精神が今も息づいている。

継承されるデザインスピリッツ

創業者 長原實氏から受け継ぐもの

カンディハウスの本社・工場にある旭川ショップの最上階に設けられたヒストリールーム。
長原氏が遺した家具などの関連書籍のほか、同社の代表的な椅子が展示されている

株式会社カンディハウス
代表取締役社長
藤田 哲也さん

1982年株式会社インテリアセンター入社。約30年にわたって営業に携わる。取締役営業本部長、専務取締役営業本部長等を歴任し、2013年より現職

暮らしのなかで使われてこそ家具としての価値がある

「カンディハウス」が創業以来守り続けてきたものづくりの原点。それがデザインです。デザインと一口に言ってもいろいろな捉え方があります。「意匠」という意味の、姿形のスタイルだけを指す場合もありますが、私たちは「品質」と「構造」そして「機能」を総合的に捉えてデザインと呼んでいます。

椅子であれば座った時の心地よさ、テーブルであれば使いやすさや強度。そういう機能性がなければ、いくらスタイリングが良くても使い続けてはもらえないでしょう。私たちの家具には職人が手仕事で仕上げる工程も多く、工芸的なものづくりをしているといえますが、つくっているものは決してアート作品ではありません。耐久性や快適性、どれ一つとして無視することなく、あくまでも使っていただいてこそ初めて価値が出る家具、実際に使っていただくための家具をつくっています。

長原が生前、よく言っていたのが「当社の家具は家財だ」という言葉です。家財という重みを持つ財産をつくり、お客さまにお売りする責任が私たちにはあります。そのために社内にレストアやヴィンテージの事業を立ち上げ、30年、40年と使われた家具を修理・再生し、財産として次の世代にまで引き継いでいただけるようにしているのです。

ものづくりの理念を引き継ぎ世界トップのブランドに

私たちの理念に惹かれ、共感して集まってきた人たちがカンディハウスの家具を支えています。しかし、工場で働くスタッフの多くは、自分たちがつくった家具がどのように評価されているのかを知る機会がなかなかありません。そのため映像などを通して、カンディハウスというブランドがどのように受け入れられているのかを、現場にもリアルに伝えています。仕事に自信と誇りを持ち、やりがいを感じることが、質の高いものづくりにつながると考えています。

創業時から私たちは世界に通じるものづくりを目指してきました。世界というマーケットでは、最高の素材を使っても、最高の強度を誇っても、デザインが認められなければニーズはありません。例えば、ヨーロッパに日本で売れている家具をそのまま持っていっても、全く受け入れられないこともあるのが実状なのです。長原が生涯にわたってデザインにこだわり続けた理由もそこにあります。

近年は欧米に加えて、アジア圏での販売も強化しています。私たちのものづくりの姿勢が世界に認識され、カンディハウスがトップレベルの家具ブランドとなるために。「メイド・イン旭川」というクオリティを武器に、世界にチャレンジしていきたいと考えています。

Furniture

器とともに暮らしを考える

北海道の情景を器に写し込む。
理想を追い求めて、
ひたすら挑み続ける。

陶芸家の思い、考え

大雪窯
Taisetsugama

二代目 板東 豊光さん
Toyomitsu Bando

三代目 板東 光太郎さん
Koutarou Bando

陶器は暮らしに欠かすことのできないものとして、
古くから食の場面や生活空間に彩りを添えてきた。
陶芸家は器づくりを通して、何を表現しようとしているのか。
その思いを聞くため、旭川で三代続いた古い窯元の「大雪窯」を訪ねた。

雪や氷を思わせる結晶が見事に浮かび上がった結晶釉の作品。さまざまな条件によって生み出された偶然の美が人の心を引きつける

北海道の自然をモチーフに美しい風景を器の上に描き出す

旭川市の閑静な住宅街の一角に「北の嵐山」と呼ばれる場所がある。陶芸家をはじめ、ガラス作家や染織家など、さまざまな芸術家たちが移り住み、文化・芸術エリアが形成されてきた。この地で三代続いた古い窯元が「大雪窯」だ。

大雪窯が開かれたのは1970年のこと。初代の板東陶光さん、二代目の豊光さん親子が、アイヌ民族の聖地とされた神秘性と、大雪山を望む自然豊かな環境に惹かれ、創作の場に選んだ。三代目となる光太郎さんは「祖父と父はこの土地の持つ力に大きなインスピレーションを受けたようです。当時は数えるほどしか家が建っておらず、ものづくりに集中できる場所だったのでしょう」と話す。

大雪窯の器には、そうした土地柄から生み出される空気感や風土などが色濃く反映されている。例えば、豊光さんの代表的なシリーズである「美瑛の丘」は、ゆるやかな丘陵や雄大な空、木々や大地が紡ぎ出す風景を描いたものだ。また、光太郎さんは北海道でしか見ることのできない、自然が持つ特有の色を表現しようとしている。モチーフやテーマ、作風は異なるが、共通しているのは「北海道の自然を写し込む」ということだ。

「私は学生時代を本州で過ごし、しばらく北海道を離れていました。久しぶりに旭川に戻って気づいたのが、自然が織りなす風景や独特の色合いの美しさでした。北海道の良さを改めて見直し、祖父や父が続けてきたように、私も北海道の魅力を器で表現したいと思いました」。

伝統の技法を引き継ぎつつ新たな表現の世界も開く

大雪窯の特徴的な技法の一つに、三代にわたって引き継がれてきた「結晶釉」がある。雪や氷を思わせる繊細な結晶は、釉薬の調合や窯の温度、焼成時間の長さなど、さまざまな条件が揃ったときに初めて浮かび上がる。結晶が必ず現れるとは限らず、非常に高度な技術が必要とされる。

結晶釉に取り組み続ける理由を、光太郎さんはこう説明する。「私たちは北海道でものづくりをする意味を大切にしたいと考えています。結晶釉は北海道らしさを表現するのにふさわしい技法なのです」。

伝統的な技法を守る一方で、光太郎さんは独自の世界観を持つ器づくりにも取り組んできた。それが「色彩釉」と呼ばれる、鮮やかな色をまとった器だ。

温かみのあるアイボリーを帯びた素地に、青や赤、黄色といった色で描き出すのは、光太郎さんが思う北海道の風景。見た人が自由に想像を膨らませられるように、抽象的な表現を心がけているそうだ。「風景や自然現象など、自分が見たものを作品づくりに生かしてはいますが、そのイメージを押し付けることはしたくない。作品を見る人が、それぞれの捉え方をしてほしいと思っています」。

光太郎さんの色彩釉の器は、和の趣と洋のモダンさを併せ持つ。代々引き継がれる伝統的な技法と現代的な感覚が融合することで、新たな作品の世界を生み出している。

生成りがかった素地と鮮やかな色使いとのコントラストが美しい色彩釉の器

三代目の光太郎さんは、その人なりの器の感じ方を大事にしたいと話す。「器を手にしたとき、作品の温もりを自然に感じ取ってもらえたらうれしいですね」

器とともに暮らしを考える

Profile

板東 豊光さん

陶芸家。大雪窯二代目。1970年に父親の一代目窯元・陶光さんとともに大雪窯を開窯。日展入選20回、日工会展や工和会展などの受賞も多数。結晶釉の器や北海道の風景を表現した「美瑛の丘」シリーズ、独自の世界観を持つ陶芸作品などが高い評価を受ける

大雪窯の敷地内に、20年ほど前に建てられた茶室。豊光さん曰く「茶室には宇宙がある」のだという。有限の小さな空間に無限の広がりを見出すという「わび茶」の精神が、器づくりにも息づいている

Profile

板東 光太郎さん

陶芸家。大雪窯三代目。多治見市陶磁器意匠研究所・東京造形大学卒業。帰郷後、父親であり、二代目窯元の豊光さんとともに作陶を行う。コーヒーカップや湯のみなど、日常の器を中心に、使いやすく、生活空間になじむ陶器を生み出している

器は生活と共にあるもの
使う人の思いを大切にしたい

若い頃は家具やインテリアに興味があったという光太郎さんは、空間の印象を左右するものとして、器も重要な要素であることに気づき、陶芸の道に進むことを決めた。「テーブルの上に一つ器を置いただけで、その部屋の空気が変わることがあります。例えば、和室の床の間に茶器や花器などを飾るのも、器がインテリアの構成要素だから。器は飾ることも使うこともできる多様性を持っているのです」。

器には美しさと同時に実用性も求められる。光太郎さんは当初「形が良ければいい」と考えていたが、デザイン性だけでは使いにくく、機能面で劣ってしまうこともあった。理想とする形を追求する作家性と、器としての実用性の折り合いをどうつけるのか。試行錯誤を続け、作るものによって分けて考えるようになったそうだが、「今でもせめぎ合い」と笑う。

「大切にしているのは使う人の思い。洗いやすい、重ねやすいといった使い勝手はもちろん必要ですが、何よりもその方の生活に潤いをもたらす器であってほしいと考えています」。

光太郎さんが陶芸家としての喜びを感じるのは、自分の作品に対する声を聞けたときだ。器を見た印象や使った感想、エピソードなど、その人の思いが込もった言葉を聞くと「なかなかいい仕事だな」と実感するという。

ものづくりの世界で生きる者にとって、今は決して楽な時代とは言えない。しかし、大雪窯の作品を愛し、使い続けてくれる人がいる。そうした多くの人たちとのつながりに支えられて、光太郎さんはこれからも生活に寄り添う器を作り続けていく。

Architects × Potters @ 大雪窯

IA研究所の建築士、スタッフが
大雪窯のワークショップで器づくりを行った。
建築士たちは、自分の手で器を一からつくる経験から
何を得たのだろうか。

ワークショップの目的

同じ「ものづくり」という意味では、設計と陶芸にはアプローチの仕方やプロセスに共通点がある。自分の手で器を一からつくる経験を通して、ものづくりの楽しさや設計という仕事の意義をもう一度見直してみる。そして「いいものを生み出していく」という建築士としての使命を再認識する。陶芸に臨むことで芸術的な刺激を受け、より良い作品づくりにつながることを期待して、ワークショップを開催した。

〈作陶開始〉

自分で描いたデザイン画を基に、つくる器の大きさや形状を決める。講師の板東光太郎さんからは、「焼くと縮むので、その分も想定して」というアドバイスがあり、それをイメージしながら、一回り大きめの作品づくりをスタートした

〈手びねり班〉

手びねり班はひたすら粘土をぺたぺたと叩いて均一に伸ばしていく。全体をゆっくりと、まんべんなく叩いておかないと焼いたときに歪むため、じっくりと作業を進める。目標は大きめの平皿や長皿。料理を盛り付けたときのことを考えて、サイズやデザインを調整していく

〈ろくろ班〉

左）ろくろ班は粘土をこねて空気を押し出す菊練りの作業。光太郎さんのお手本を真似るが、思うように練ることができない。「菊練り3年」という光太郎さんの言葉に全員納得する

右）電動ろくろに粘土を載せ、回転させながら、手で包むように優しく丁寧に伸ばす。高さを出すのが難しく、ちょっとした加減で形が歪む

高橋 義光（専務取締役）
形を丸くするのが難しく、試行錯誤でした。目指すものがあって、問題を見つけて解決する課程は設計と共通していると感じましたね。皿には刺身やタリアータを盛る予定です。

佐々木 司（常務取締役）
粘土をこねるのも、伸ばしていくのも、想像よりはるかに難しかったです。丼もの用の器が欲しかったのですが、縮む分を想定してつくったら、サイズがだいぶ大きくなりました。

河野 健三（設計主任）
家族4人分の唐揚げを盛る大皿をつくりました。手びねりだったせいか、思っていたよりスムーズにできました。無心になって粘土と向き合う作業はとても楽しかったです。

相内 恭平（設計担当）
湯飲みとおちょこをつくりました。手びねりは経験がありましたが、ろくろは初めて。形をつくるのが難しかったです。持ちやすいように湯飲みに筋を付けたのは大成功でした。

ワークショップを終えて
－ 作陶から得たもの －
STAFF'S VOICE

寺島 良成（設計担当）
サンマ用の長皿です。思ったように粘土が伸びず、形を整えるのに苦労しました。自分で手を動かすことの大切さやものづくりの楽しさを、改めて感じることができました。

中井 久美（設計担当）
大雪山をイメージしてそばちょこと小皿をつくりました。前から陶芸に興味があったので楽しみでした。イメージをどう形にするかなど、設計と通じるものがあると思いました。

奥山 敦子（経理担当）
愛犬用の水入れです。力のいる作業が多く、特に菊練りが難しかったですね。教えられた通りにつくって何とか形になりました。ものづくりは大変だな、と実感しました。

佐々木 雅敏（代表取締役）
設計と陶芸はものづくりという点では同じで、思いを込めてかたちにする楽しさや難しさがあります。今回のワークショップでもものづくりの楽しさを再認識し、これからの仕事に活かしてほしいと思います。

風土や生産者とともに食を考える

料理人を目指すのに格差はない。
実力があればチャンスは平等に訪れる。

料理人の思い、考え

FRATELLO DI MIKUNI
フラテッロ・ディ・ミクニ

代表シェフ 堀川 秀樹さん
Hideki Horikawa

北海道の食材を生かした「北海道イタリアン」を提唱し、
生産者との信頼関係を大切に育んできたシェフがいる。
北海道におけるイタリア料理を牽引してきた堀川秀樹さんは、
どのようにしてこの地に根を下ろし、
生産者と関わってきたのだろうか。

「いつかは自分の店を」ひたむきに働いた下積み時代

オープンスタイルの厨房では、何人ものスタッフが忙しく立ち働いている。目の前に運ばれてきた料理からは、食欲をそそる香りが漂い、一口食べたゲストは、その味わいに思わず笑みをこぼす。そんな、人を魅了する料理を生み出しているのが堀川秀樹さんだ。

堀川さんが料理人を目指すきっかけになったのが、16歳の時にアルバイト先で料理をつくったことだった。空になって戻ってきた皿を見て、「こんなに喜んで食べてもらえるなんて！」と感動し、自分の店を持とうと決意。18歳で横浜のイタリアンレストランに就職し、「仕事の厳しさを教えてもらった」と振り返るように、ひたすら必死に働いた。

その努力が実り、25歳の時に鎌倉にあるイタリア料理の名店「タベルナ・ロンディーノ」で働く機会を得る。5年間料理人としての修行を積んだ後イタリアに渡り、約1年半にわたって料理を学んだ。そこで得たものは、イタリア料理の技術だけでなく、何百年も前から続く伝統的な料理を今も大切にする「食文化」のすばらしさだった。

大きな刺激を受けた北海道の生産者との出会い

イタリアから戻った堀川さんは、札幌のイタリアンレストランのシェフに、という誘いを受ける。その下見で初めて札幌を訪れたときの印象は、今も心に残っているという。

「新千歳空港から札幌に向かう高速道路で見たロケーションが、イタリアの風景とオーバーラップしました。人柄も温かく、そこもイタリアに似ていると感じました」。

北海道という土地に縁を感じた堀川さんは、5年間イタリアンレストランのシェフを務めた後、1998年に札幌に「トラットリア・テルツィーナ」をオープン。10代の頃に描いた「自分の店を持つ」という夢をかなえた。

堀川さんにとって大きかったのが、地元の生産者との出会いだった。今でこそ「地産地消」という言葉が一般的になったが、当時は地元食材にこだわる店はまだ少なかった。「イタリアでは、地元の食材を使うのは当然という考え方でした。北海道にはおいしい野菜や肉、魚介が豊富にある。地元の食材を積極的に使ったところ、生産者の人たちが料理を食べにきてくれるようになったのです。志のある生産者の人たちと出会い、その情熱や努力を知るうちに、北海道の食材の魅力や食文化をもっと広く伝えたい、と考えるようになりました」。

2016年に恵庭で新店を開いたのも、野菜の生産農家が多く、新鮮な食材がすぐ手に入る環境に惹かれたからだ。実際に畑に足を運び、収穫をさせてもらうなど、生産者との交流も刺激になっているという。

堀川シェフが新たな業態のイタリア料理店として、2016年に恵庭で開業した「cafe terzina（カフェ テルツィーナ）」。地元産の野菜をふんだんに使ったパスタや一品料理を、気取らない雰囲気のなかで楽しむことができる

■cafe terzina
恵庭市島松寿町1丁目28-10
TEL 0123-37-6267
営業時間　月曜11:00～LO17:00　水曜～日曜11:00～LO19:00
火曜定休（祝日の場合翌日休）

シェフの思いを込めた「一皿」を味わうことができるレストランが上川の地にある

フラテッロ・ディ・ミクニから少し離れた木立の中に佇むヴィラ。2016年には新たにスウィート仕様の「ラ・ヴィッラ」とツインルームを3室備えた「ヴィラ・フィオーレ」がオープンした。くつろぎ感のある空間や旭川家具を用いたインテリア、大開口の窓からの眺めなど、上質な時間を過ごすことができる

小高くなった丘の上に立つフラテッロ・ディ・ミクニ。レストランの席からは北海道らしい雄大な風景が目の前に広がる。この眺めも極上の料理を演出する大切な要素になっている

風土や生産者とともに食を考える

感動を呼ぶ料理と景色 フラテッロの魅力

上川町の大雪森のガーデンにある「フラテッロ・ディ・ミクニ」は、日本を代表するフレンチのシェフ三國清三氏と共同でプロデュースを手掛けた店。多くの観光客が訪れる人気のガーデン内ということもあり、開業前から大きな注目を集めた。

雄大な大雪山を望み、眼前には豊かな緑が広がるロケーションを評して、堀川さんは「2～3割増しで料理がおいしく感じられるはず」と笑う。「北海道イタリアン」を掲げ、メニューに並ぶのは上川町をはじめ、北海道産の食材を使った料理ばかりだ。そこからは、「この空間でしか味わえない料理、景色とともに、生産者の思いを感じてほしい」という堀川さんからのメッセージが感じられる。

フラテッロ・ディ・ミクニの開業は、堀川さんにとって一つのターニングポイントにもなったという。1年をかけて厨房を任せるグランシェフにノウハウを伝え、開業時の1カ月間は上川町に泊まり込んだ。

「これだけの恵まれた条件でレストランを任せてもらうことはなかなかない。そう考えると、とても運が良かったと思います。多くの人との出会いや新たに学ぶこともあり、貴重な経験になりました」。

スタッフからは「シェフ」ではなく「堀川さん」と呼ばれている。それは、みんなと同じ目線でいたい、という考えからだ。スタッフを信頼し、ある程度の経験を積んだら料理を任せることで、スタッフの「自分の店」という意識も育てるようにしている

シェフはサービス全体をプロデュースする仕事

堀川さんはシェフという仕事を「プロデューサー」だと表現する。おいしい料理をつくって、人を幸せにすることは当然のこと。それ以上に、調理やホール、皿洗いまで、関わる多くのスタッフを一つのチームとしてまとめ、質の高いサービスが成立するようにプロデュースすることが重要なのだという。「お客さまは、さまざまな要素も含めてレストランに満足してくれる。シェフはトータルでサービスをつくりあげる役割だと考えています」。

堀川さんは若い料理人の育成にも熱心なことで知られる。自分が下積み時代に辛い経験をしたからこそ、それとは違うやり方で人を育てたいと考えている。「イタリアで働いた店は、とてもアットホームでありながら、一人一人が料理人としてのプライド持ち、それを尊重し合っていました。その関係がすごく素敵だなと。自分も店を持ったら、真似しようと思いました」。

料理人としての人生を、堀川さんは「チャンスに恵まれていた」と話す。料理人には学歴や家柄は関係ない。実力の世界だ。そこに努力と思い込みがあれば、チャンスは巡ってくるというのが堀川さんの考えだ。「料理人を目指すには時間もかかるし苦労もする。理想と現実の壁にぶつかることもあるけれど、強い気持ちを持ち続けていれば自然に導かれていくはずです」。若い人たちへの期待を込めて、そうエールを送る。

「自分を料理人として認めてくれた北海道と、料理人のベースをつくってくれたイタリアに感謝している」と堀川さん。両者に恩返しをしたいという強い思いが、食で人に感動を与え続ける原動力になっている。

フラテッロ・ディ・ミクニや4棟あるヴィラなどは、大雪森のガーデン内の施設として、環境との調和を図り、主張し過ぎることなく自然にそこに存在するように計画された。それらの建築群にゆるやかな統一感を持たせることで、エリア全体のつながりも演出している。施工は可能な限り地域の技術者や職人が対応できる工法を採用し、試行錯誤を重ねながら丁寧に空間を築いていった

Profile

堀川 秀樹 さん

トラットリア・ピッツエリア・テルツィーナ オーナーシェフ、フラテッロ・ディ・ミクニ代表シェフ。神奈川県出身。「北海道イタリアン」を代表する料理人として、生産者と連携しながら地域の食材を生かした料理を提供する

若者たちとともに未来を考える

人としての心を育て社会で生きる力を養う。
教育の未来はきっと明るい。

教育者の思い、考え

学校法人北海道浅井学園
Hokkaido Asai Gakusen

理事長 浅井 洋子さん
Yoko Asai

社会のあり方がこれまで以上に速いスピードで変化していくなか、
見直されているのが、未来を担う子どもたちを育てる教育の重要性だ。
学校法人の理事長として教育に関わってきた浅井洋子さんは、
教育や若い人たちに対して今、どのような想いを持っているのだろうか。

負けず嫌いと人一倍の努力 若い時は試行錯誤の連続

1939年の創立から、数多くのデザイナーやクリエイターたちを世に送り出してきた「北海道ドレスメーカー学院」(※1)。北海道におけるファッションデザイナーの草分け的存在である浅井洋子さんは、その院長として若い人たちの教育に情熱を傾けてきた。

学校法人浅井学園の創設者を両親に持つ浅井さんは、これまでを「順風満帆な道のりではなかった」と振り返る。10代の頃は学校教育に没頭する親に反発して、別の道に進むことを考えたこともある。しかし、杉野学園時代に留学したアメリカで、自立して働く女性の姿を見たことが転機になった。「アメリカでは私の母のように働いている女性がほとんどでした。母の偉大さ、先見性に気づき、私も少しでも母に追いつきたいと考えが変わりました」。

大学を中退して北海道ドレスメーカー学院に入学したものの、洋裁は苦手。克服するために、寝ないで練習を繰り返したこともあったという。「デザインは好きだけど、縫うのは本当に下手でした。でも負けず嫌いだったので、誰よりも努力をしました。失敗もたくさんありましたが、試行錯誤を繰り返すうちに、あきらめないで続けることの大切さを学びました」。

(※1)創立当初は「北海道ドレスメーカー女学園」

人の暮らしに欠かせない 衣・食に関わる人づくり

北海道ドレスメーカー学院は創立以来、服飾の専門教育とそれらに携わる人材育成に力を注ぐと同時に、日本の服飾文化の発展に取り組んできた。また、浅井さんが理事長を務める学校法人北海道浅井学園は、1972年に「旭川調理師専門学校」を開設し、食の分野における多様な人材育成のための教育を実践してきた。

衣・食という生活と関わりの深い分野で人を育てることの意味——それは「生活の基盤」を支えるための教育を通して、人間にとって必要な教養や技能を養うこと。そして、人としてどう生きるかを考える力を身につけてもらうことだ。浅井さんは「今の時代だからこそ、そうした教育が大きな意味を持つ」と話す。

「英才教育も大切かもしれませんが、重要なのは自分で考える力を持った人間を育てること、豊かな心を持った人をつくることです。今は小さい時からたくさんの情報を与えられて育つ反面、自分で考える機会が失われています。私たちが目指しているのはEQ（心の知能指数）を養う教育。社会から必要とされ、意味のある人生を送るための人間教育がとても大切だと思っています」。

北海道ドレスメーカー学園の教育プログラムの特徴の一つが、学生たちが企画・運営する「:Dcreation」。自力でプロジェクトをやり遂げた経験が、学生を大きく成長させる。そして自らのブランドを立ち上げ世界にプレゼンテーションしていく

今でもデザイナーとして作品を発表し続ける浅井さん。作品づくりでは、コンセプトやテーマ、イメージなどを決めてから、具体的な作業に入る。時には作品に合わせて生地からつくることもあるほど、オリジナルの世界観に強いポリシーとプライドを持つが、「それがものづくりの基本」だと話す

旭川調理師専門学校は、地域性を取り入れ、木を生かした空間デザインになっている。明るく、開放的な環境で学生たちは料理人としての心と技術を学ぶ。
また、地産地消にこだわり、制作（農業）から、収穫、商品化まで手掛ける力を身につけていく

若者たち ともに 未来 を考える

「明るく 正しく らしく」
個性や感性を伸ばす教育

浅井さんは、「自分らしさ」に気づかせる教育が重要だと話す。それを表しているのが、「明るく 正しく らしく」という校訓だ。

「自分は何に向いているのか、何をすべきなのかといったことを知るには、自分と向き合う必要がある。自分の長所や強みを伸ばそうとすれば、どんどん自分を掘り下げることになる。そういう過程が、自分らしさを追求することにつながる。考えが変われば行動が変わる」と浅井さんは話す。

なかには、謝ることができなかったり、決まりが守れなかったりする学生もいる。しかし浅井さんは、そういう若者たちにも深い理解を示す。何も考えずに正しいと教えられたことをするより、間違ったことをして、それを正されたときに「なぜだろう」と考えることにこそ意味があるからだ。

「どう行動したらいいのか、どう改善したらいいのかを考えることで、子どもは大きく成長します。校訓に『正しく』とありますが、完璧な人間なんていません。間違いに気づいたら直していけばいい。その積み重ねが人間としてのキャリアになっていくのです。学生たちには、“汝その地を深く掘れ！ そこに泉あり。夢は叶うよ！”といつも話しています」。

日々の実習を繰り返し、料理の基礎から実践的な技術まで幅広く身に付けていく
学内に併設されたレストランでは、外部の人を招いて料理を食べてもらう実習などが行われる

社会を活気づける原動力に
教育が果たす役割

高齢化や人口減少など、地域社会は活力を失いつつある。そんな時代のなかで、教育や学校は何ができるのだろうか。浅井さんは、「若い人のエネルギーには、計り知れない無限の力がある」と話す。学校は、地域に活気を呼び戻し、経済効果を生み出す原動力になり得るのだと。その言葉を実践するように、北海道ドレスメーカー学院は地域イベントにも積極的に参加し、コミュニティとの関わりを深めてきた。また、子どもたちを対象にした手作り教室やミシン体験などを開催し、好奇心や社会性を育む活動にも力を入れている。

専門学校は職業人を育成する教育機関と思われがちだが、「私たちは単に技術を教えるために学校を経営しているのではない」と浅井さんは力を込める。学生は洋裁や料理を通して、自分の未来を模索するために入学してくる。未知数の可能性を持つ彼らに、自分を磨くことの大切さや夢をかなえるのは自分自身なのだと気づかせること。そして、努力を続ければ未来は開けると自信を持たせること。それこそが必要とされる教育なのだと。

「私の役割は方向性を示すこと」だと話す浅井さん。自分が見た映画の感想、コンテストに参加した学生たちへのねぎらいの言葉など、心に感じたことを講義や校内放送を通して話すようにしているのも、院長としての思いをできる限り直接伝えるためだ。「何度も繰り返して語りかけることで、学生たちの心のどこかには残るはず。それが人生や未来について考えるきっかけになってほしい」と語る。

「一人の人間がいくつもの能力に恵まれることは稀です。何か一つでも秀でたものがあれば、それを深く追求していけばいい。欲張る必要はないのです。私は教育の道一本でした。教育に捧げた人生。それも本望だと思っています。教育は人をつくるというすばらしい仕事であり、学園は“自分探しの旅”を応援する使命・役割があるのです。若い人たちには“ライバルは自分だよ！”と伝えていきたいですね」。

地域の人々や環境との融和を図り、食の創造拠点となることをイメージして設計された旭川調理師専門学校

Profile
浅井 洋子さん

学校法人北海道浅井学園理事長、学校法人浅井学園北海道ドレスメーカー学院院長。40年以上にわたり教育者としてファッションや食分野での人づくりに力を注ぐと同時に、自らもファッションデザイナーとして活躍している

文化とともにまちの未来を考える

写真には人と人をつなぐ力がある。
東川町に生きる誇りを伝えていきたい。

毎年夏に開催される写真甲子園は、全国の高校写真部の目標になっている。懸命に撮影をする高校生たちの姿が感動を呼ぶ

写真文化をテーマにした唯一無二のまちづくり

大雪山国立公園の麓に広がる東川町は、農業や木工業、観光業を基幹産業とする人口8000人ほどのまちだ。1985年に「写真の町宣言」をしたことで全国的に知られるようになった。2015年度には人口増加率が全道2位になるなど、まちづくりの成功事例として注目されている。

写真の町プロジェクトの拠点となっているのが「東川町文化ギャラリー」だ。1989年の開設以来、文化や芸術の情報発信基地として、さまざまな活動を行ってきた。

2017年の春まで館長を務めた窪田昭仁さんは、写真の町を宣言するに至った経緯をこう説明する。「当時は一村一品運動によるまちおこしが盛んな時期で、当町では写真の被写体にふさわしい自然景観があることから、写真によるまちおこしを企画しました。当初は一過性のイベントを考えていましたが、住民が主体的に参加でき、未来まで継続するまちづくりにしようという意見が出たことから、写真の町を宣言し、写真の町条例をつくりました」。

宣言以降、東川町は「写真の町東川賞」の創設や「東川町国際写真フェスティバル」の開催など、写真を核にした独自の取り組みを展開してきた。東川町文化ギャラリーでは、イベント時の中核施設としてフォーラムの開催や受賞作品の展示などを行うほか、過去の受賞作家の作品を収蔵し、30年に及ぶ活動の記録を残している。

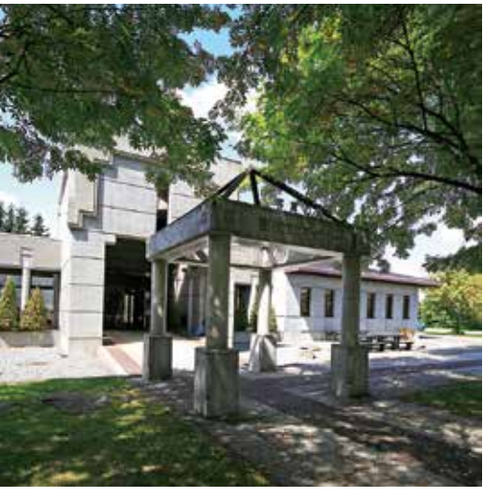
注目を集めることで町も人の意識も変わる

こうした取り組みのなかで、東川町の名前を全国区にしたのが、1994年に始まった「写真甲子園」だ。全国から選抜された18の高校の写真部が東川町に集い、4日間にわたって写真の表現力や技術を競い合う。参加選手を受け入れるホームステイや地元のボランティアによる炊き出しなど、多くの住民の協力によって運営されている。

東川町文化ギャラリーで学芸員を務める吉里演子さんは、写真甲子園をきっかけに東川町に移り住むことになった。「高校3年生のときに写真甲子園に出場し、大学時代はボランティアとして参加しました。東川町の人たちとの関わりが深くなるにつれて、自分も東川町民になりたいという思いが強くなって。大学卒業と同時に生まれ育った大阪から移住しました」。

現在、吉里さんは写真関連のイベントの企画や運営に携わるほか、写真コンテストの審査員や講演会の講師を務めるなど、東川町の「顔」として活躍している。

写真の町を宣言した当時は「何の意味があるのか」という声もあったが、イベントに関わり、社会から注目されることで住民の意識は少しずつ変化していった。ホスピタリティや町への愛着が育まれ、宣言の意味も理解されるようになった。吉里さんは、「地域の人たちと関わって思うのは、町の魅力を伝える言葉を持っているということ。写真の町としての意識が浸透していることが、東川町のパワーの源なのでは」と写真の町宣言による成果を語る。



文化を支える人の思い、考え

東川町文化ギャラリー
Higashikawa Bunka Gallery

元館長
現東川町税務課課長 窪田 昭仁さん
Akihito Kubota

学芸員 吉里 演子さん
Hiroko Yoshizato

「写真の町」として全国的に名前を知られる東川町。
写真という文化を切り口にしたまちづくりにおいて
中核的な役割を果たしているのが東川町文化ギャラリーだ。
プロジェクトの経緯と地域における文化施設の在り方を聞いた。

※取材は2016年11月に行いました

左／写真の町・ひがしかわ写真少年団 高橋亜依「虹色の巣」
右上／写真甲子園2017優勝校 和歌山県立神島高等学校「station」より
右下／第33回写真の町東川賞国内作家賞 本橋成一「炭鉱〈ヤマ〉／鞍手、福岡　1965年」

シニアクラブのワークショップでは、吉里さんのほかに、東川町の地域活動を支援する“地域おこし協力隊”のメンバーが講師を務める。写真をテーマに楽しく活動することが、交流の促進や生きがいづくりにも役立っている

東川町立東川小学校と東川町地域交流センター。東川小学校の新築移転にあたり住民参加によるワークショップを開催し、そこで描かれた将来像をもとにランドスケープと調和したデザインが計画された。教室と一体になったオープンなワークスペースが横に連続し、片流れ屋根とともに特徴的な外観をつくりだしている

写真提供（上3点）：酒井広司（グレイトーンフォトグラフス有限会社）

写真文化のすばらしさを子どもたちに引き継ぐために

東川町では住民にも写真に親しんでもらい、写真の町としての魅力をより深めることも重視している。東川町文化ギャラリーでは学校やシニアクラブと連携したワークショップの開催など、写真関連の事業による生涯学習、人づくりに取り組んでいる。

特徴的なのは子どもたちへの啓発・教育活動だ。2013年に設立された「写真の町・ひがしかわ写真少年団」は、小学3年生から中学3年生を対象に、撮影会や合評会などを行っている。東川中学校に写真部がなかったことから、写真に興味のある子どもたちの活動の場をつくろうと吉里さんが企画した。「子どもたちが自然に集まって写真の話ができるような環境があってこそ写真の町だろう、と。将来は写真甲子園に出場する選手が出てほしい」と期待を寄せる。

東川町幼児センターでは、就学前の5歳児を対象にしたプレスクールの一環として「写真教室」を開催。吉里さんが講師となり、写真文化によるまちづくりの話や撮影方法などの説明、撮影会などを行っている。また、東川小学校の4年生を対象にした「写真ワークショップ」では町内の写真家を迎え、撮影技術の説明や撮影会などを実施。児童たちはテーマを決め、作品づくりにも取り組んでいる。

吉里さんは、カメラを手にした子どもたちの生き生きとした様子に感動を覚えたという。「小さい子どもでもカメラに興味を持ってくれました。伝えたことを吸収する力には驚かされるほど。子どもたちの持つ可能性を感じました」。

写真の町・ひがしかわ写真少年団の活動では、町から一眼レフカメラを貸し出し、写真を撮る楽しさを体感してもらいながら、作品づくりやフォトコンテストへの応募などに取り組んでいる

子どもを対象にした教育活動では、大人にはない視点や発想に驚かされることもあるという。子どもが写真と関わることで、保護者も関心を持つという相乗効果も生まれている

「写真の町というブランド化においては一定の成果があったと思います。今後は蓄積したアーカイブの公開などにも取り組む必要があると思います」（窪田さん）
「イベントやワークショップなど、地域の人たちにもっと写真文化の魅力をわかりやすく伝える機会も増やしていきたいですね」（吉里さん）

Profile
窪田 昭仁 さん

東川町税務課課長。東川町役場採用後、総務課、産業振興課、幼児センターなどを経て、2015年から2017年3月まで東川町文化ギャラリー館長を務める

Profile
吉里 演子 さん

東川町文化ギャラリー学芸員。大阪府出身。高校時代に写真甲子園に参加し、大学卒業とともに同町に移住。臨時職員として1年働いた後、2011年より現職

写真で人々をつなぐ文化形成の拠点として

東川町文化ギャラリーは、東川町の写真文化を発展させる上で、これからどのような役割を果たしていくのだろう。

窪田さんは「写真は、今でも一部の人の趣味と受け取られがち。どうやってより多くの人に写真に興味を持ってもらい、継続的にまちづくりに参加していただけるかが課題」と話す。ワークショップに力を入れているのも、町の人たちと顔の見える関係を築き、足を運んでもらいやすくしようという狙いがある。

写真文化でまちを活性化し、人々を元気にする、という前例のないプロジェクトは今後も続く。その担い手である吉里さんは、東川町に対する思いや希望をこう語る。「豊かな写真文化のある町に生まれ、生活するというのはすばらしいこと。その魅力を多くの人に感じてもらえる機会をつくるのが目標です。日々の生活や人々との会話の中からヒントを見つけて、まちづくりに生かしていきたいと思います」。

東川町幼児センター「ももんがの家」。雄大な大雪山連峰や田園地帯を背景に、外観は平家の水平ラインと吹き抜けの三角屋根や塔で構成し、東川町の景観と融合したスカイラインを形成している。内部は、一日中陽ざしが降り注ぐプレイルームを中心に諸室を配置。子どもたちの活発なコミュニケーションが生まれる温かな空間構成となっている

景観とともにまちづくりを考える

地域の風土や歴史に基づく景観なら自ずと未来につながっていくはず。

景観アドバイザーの思い、考え

橋場 光さん
Hikaru Hashiba

景観をまちづくりに生かそうという市町村が増えている。
景観とは、そして景観とまちづくりの関係とはどのようなものなのだろう。
北海道の景観づくりのパイオニアである橋場光さんに話を聞いた。

橋場さんが携わった旭川空港の景観計画では、ランドスケープの視点を取り入れ、照明や駐車場、樹木の配置などまで含めてデザインされている。景観を阻害する屋外大型広告物を排除するなど、景観保全を重視した

景観にはその土地固有の特性が表れている

まちづくりや都市計画において、近年、特に重視されているのが「景観」という要素だ。日本では2004年に「景観法」が制定されたことで、それまでの無秩序な都市開発から、調和のとれた美しい景観形成を目指すまちづくりへと社会の意識がシフト。その地域ならではの魅力や個性を持った景観の意義が、改めて見直されるようになった。

景観という言葉は、一般的には「景色」や「眺め」を意味するが、地理学や建築学などの分野では、英語のランドスケープ（landscape）、ドイツ語のランドシャフト（landschaft）に相当し、その空間を構成するさまざまな要素を示す言葉として使われる。橋場光さんは1960年代から、街の構成要素としての景観に注目し、数多くの研究やプロジェクトに携わってきた。

橋場さんによると、景観とはその地域らしい特性が表れたものであり、文化や土地柄、ときには気質までも含んだ概念。そうした地域固有の景観を保全し、生かすようなまちづくりが求められるようになってきている。

橋場さんは、景観条例の策定や層雲峡地区の再開発など、上川町のまちづくりにも関わった。大雪山を望む自然環境や広大な牧場、層雲峡温泉など、長年引き継がれてきた地域特性を生かすという理念は、上川町のまちづくりの基本構想の中で第一に掲げられている。その構想に基づき、“まきば・まちば・おんせんば”をつなぐという視点から、大雪森のガーデンを中心とする旭ヶ丘地区の活性化プロジェクトがつくられた

地域の魅力を掘り起こす景観づくりはまちづくり

橋場さんは「地域の住民と交流し、文化や産業などを深く理解することも景観づくりやまちづくりを進める上では重要」と話す。美瑛町の建築協定の監修では、住民にも参画してもらい、美瑛軟石を建物の一部に使うことをルールに定めるなど、美瑛町らしさを打ち出した。住民と共にプロジェクトを進めることで、「自分たちのまちづくり」という意識を醸成し、まちへの愛着やそこに暮らす意義の再認識にもつながった。

こうしたプロジェクトを進める上で心掛けていたのが、「どんな小さなことでも、いいところを探す」ということだ。地域の人たちですら気づいていない魅力や持ち味、資源を掘り起こし、まちづくりに生かすこと。それが景観計画の意義だという。「景観を考えることは、まちづくりを考えることに。景観づくりとまちづくりは一体のものなのです」。

美瑛町建築協定に基づき、建物正面の腰部分（幅木）に美瑛軟石を使った美瑛町駅前通りの街並み。趣のある美瑛軟石づくりの駅舎や公共施設など、随所に美瑛町の歴史や文化を伝える工夫がされている

まちの未来を描く景観計画の可能性

景観計画は、何十年も先の地域の姿を思い描き、まちづくりの方向性を示す役割も果たす。スケールの大きなプロジェクトは困難を伴うこともあるが、それが未来に引き継がれていくという大きなやりがいや喜びもある。

これからは地域の人口減少がさらに加速していく。従来のような成長前提型の都市計画では、存続できない地域も出てくるだろう。長年の経験から橋場さんが行き着いたのは、「どんな時代にあっても、固有の特性をまちづくりに生かすことが、その地域の強みになる」という結論だった。

「景観計画やまちづくり計画は、そこに暮らす人たちが運営して、引き継いでいくものです。成否の検証は難しいのですが、一つの目安として、人々が日常の生活を繰り返していく状態が成り立っていれば、まずは成功と考えていいのではないでしょうか」と橋場さん。地域の人たちが自立的に運用できて、自然に地域に根付くこと。橋場さんが理想とするまちづくりは、これからの地域にとって大きな意味を持っている。

Profile
橋場 光さん

一級建築士。北海道大学大学院工学研究科修士課程修了。北海道景観アドバイザー、北海道美しい景観のくにづくりアドバイザー等を歴任。景観づくり・まちづくりの専門家として、多くのプロジェクトに携わった経験を持つ

日常の一部としてガーデンを活用してもらうことで、生活を豊かにするというのも狙いの一つ。最近ではコンサートやヨガなど、イベントに利用されることも増えている

Case Study

都市の「顔」としてのガーデンをつくるということ

地域を象徴する「ガーデン」をつくるプロジェクトはどのようなプロセスで進められるのだろうか。高野ランドスケーププランニングの村田周一さんに「あさひかわ北彩都ガーデン」のケースを解説してもらった。

高野ランドスケーププランニング株式会社
代表取締役
村田 周一 さん

東京都出身。京都大学農学部生産環境科学科卒業。十勝千年の森（清水町）、大雪森のガーデン（上川町）など、国内外で数多くのプロジェクトを手掛ける。あさひかわ北彩都ガーデン（旭川市）の実施設計において、2015年度日本造園学会賞（設計作品部門）受賞

Q プランのコンセプトはどのようなものでしたか

A 最大の特徴は、「街中のリゾートをつくりたい」と宣言したことでした。街の中心にありながら、忠別川の流れがあり、自然とつながることができるエリアだったので、市民がくつろぐことができて、街中だけどリゾートみたいな場所をつくろう、というのが狙いでした。また、観光客には旭川らしい風景のなかで心地よさを感じてもらえる場所に。植物はなるべく地元のものを使って、無理なく生育できる環境にしようと。みんなにとってオアシスのような場所をつくっていこうというのがメーンコンセプトでした。

Q あさひかわ北彩都ガーデンができた経緯を教えてください

A 平成2年に旭川駅周辺整備計画がスタートし、20年以上にわたって駅周辺の再開発事業が進められてきました。駅の南側は、初期段階でつくられたマスタープランに基づいて緑地として再開発することになり、具体的な計画や設計がつくられました。

当初は一般的な河川緑地にして、その一部を公園として整備する計画でしたが、北海道にガーデンブームが起きたことで、市民から「単なる緑地ではなく、人を惹きつけるようなガーデンにした方がいい」という声が聞かれるようになりました。その意見を受けて、旭川市では計画の見直しを行い、ガーデン空間の整備を決定。改めて設計のプロポーザルがあり、私たちのプランが選ばれたというのが、このプロジェクトの背景です。

Q 作業はどのように進めたのでしょうか

A まず、ガーデンの具体的な設計に着手しました。過去につくられた全体方針のようなものはありましたが、実際には基本計画から見直して、実施設計をすることになりました。本来は3年くらいかけて行う作業なのですが、スケジュールの都合上、1年間で仕上げました。

作業を進める上で配慮したのが、プロジェクトに関わる人たちとの調整でした。発注者である旭川市の他にデザイン統括をしている監修者、河川があるので国土交通省、駅直結なのでJRと、関係者との調整にもかなり時間をかけました。

工事が始まってからは、現場での施工管理を行いました。特に植物の場合は、図面では表現できないことが多くあるので、1株1株、どのように植えるのかということまで現場で細かく指示を出しました。

もともとあったハルニレの大木をシンボルツリーとして生かし、ゆったりとした芝生の広場を設けて駅と川をつなぐようにした

Q あさひかわ北彩都ガーデンの特徴はどのようなものでしょうか

A 世界的にも類を見ないプロジェクトだと思います。駅に直結した緑の空間というのはありますが、そこに川があるのは非常に珍しく、世界に誇れる場所なのではないでしょうか。かつて言われた「駅裏」ではなく、むしろ旭川の「顔」や「シンボル」と言える存在になったと考えています。

また、旭川らしさ、を取り入れている点も特徴です。椅子やテーブルには旭川家具を使い、植栽では優佳良織のパターンを表現しました。敷石に街中の石畳に使われていた石を再利用して、歴史や記憶を引き継ぐこともイメージしました。

駅に近いエリアの植栽は、旭川の伝統工芸である優佳良織のパターンを参考に色の帯をつくるようにデザインした。駅側は園芸種を中心に用い、忠別川に近づくにつれて自生種を増やすことで、都市と自然を結ぶようにしている

Q 今後、あさひかわ北彩都ガーデンはどのようになってほしいと思いますか

A 私がガーデンづくりで大切にしているのは、屋外空間をどのように生活と密着させるか、ということです。ガーデンを活用することで、健康づくりやコミュニティづくりに役立ったり、社会が抱える問題の解決にもつながったりする可能性があると考えています。

あさひかわ北彩都ガーデンは旭川らしい自然が感じられる場所なので、市民の皆さんに積極的に生活に取り入れてもらい、旭川ならではの豊かなライフスタイルの形成に役立ててほしいと思います。

「あさひかわ北彩都ガーデン」
旭川駅と忠別川に挟まれた区域につくられた、約19ヘクタールに及ぶ広大なガーデン。2012年〜2014年にかけて工事が行われた。2015年度日本造園学会賞（設計作品部門）・2015年度土木学会デザイン賞最優秀賞・2015年度都市景観大賞受賞

Garden

Case Study

都市の「顔」としての ガーデンをつくるということ

Q 都市におけるガーデンの役割とはどのようなものですか

A 生活の潤いやゆとりを感じさせる場所、ということだと思います。都市では建物の高層化や高密度化が進んでいますが、それとは正反対の、平面的で水平ラインが続く空間があるというのはとても豊かなことです。北彩都ガーデンでいえば、大雪山の山並みまで見える。そういうシーンは、人間の本能に訴えかける圧倒的な力があると思います。

「ガーデンづくりは思うようにいかないこともありますし、やればやるほどわからないことが増えていく。ゴールのない仕事ですが、たくさんの経験が積めて、人間としての懐を深くしてくれると感じています」

Q ガーデンをつくる仕事の魅力を教えてください

A 一番の魅力は、何十年、何百年と未来に続く仕事ができることですね。東京でビルに囲まれて育った私は、後世に必要なのはコンクリートの構造物よりも緑（自然）だと考え、京都の大学で森について学びました。小さい頃からものづくりが好きだった私にとって、ガーデンをつくる仕事は緑を育むだけでなく、自分の手掛けたものを未来に残すという夢もかなえてくれる、わくわくする仕事です。

村田さんが実施設計を手掛けた「大雪森のガーデン」は、第32回都市公園等コンクールにおいて最高賞の国土交通大臣賞に選ばれた（設計を担当した高野ランドスケーププランニングと上川町が受賞者）

高野ランドスケーププランニングが手掛けるプロジェクトの特色の一つが住民参加型。北彩都ガーデンは草花の植栽作業に市民が参加したことでガーデンへの愛着が育まれ、今では100名ものボランティアが定期的に管理を行っている

建築士の思い、考え

株式会社IA研究所
Institute of Interior Architecture Inc.

人々の暮らしとともに建築を考える

一級建築士 高橋 義光 Yoshimitsu Takahashi
対談
一級建築士 佐々木 司 Tsukasa Sasaki

日々の暮らしを営む住宅から巨大な公共インフラまで、建築という言葉に含まれる構造物の定義は多岐にわたる。人々の生活と深く関わる建築の魅力やビジョンについて第一線に立つ建築士に語り合ってもらった。

ニーズをかたちにする建築に携わる意義

―― 建築という仕事の魅力は何でしょう？

高橋　私は旭山動物園の施設設計を担当していました。クライアント・管理者・利用者に加えて「動物」の立場を考えるという難しさがありましたが、そのプロジェクトが世界中から注目を集め、多くの方々に感動していただける空間づくりができることに大きな魅力を感じています。

佐々木　私が建築にはまったきっかけは、学生時代にアルバイト先で使う家具のデザインを描いたことでした。周りのニーズを聞きながら描いたものが、かたちになる喜びを知ってしまった。それが私の仕事の原点になっています。

高橋　ニーズを聞くことはこの仕事ではとても重要ですよね。相手の立場になって考えて、いろいろ工夫した思いが伝わったときは、まさに建築士冥利に尽きる瞬間です。

佐々木　私はIA研究所が手掛けた建築物に共感して入社したので、自分が「いいな」と思っていたような建築に携われることにはやりがいを感じていますね。

高橋　そういえば、周りからはよく「IAさんらしい建築だね」って言われるんです。IAらしさって何でしょうね。

佐々木　あまり意識はしていなかったけれど、旭川的な様式を引き継いでいるところでしょうか。レンガと打ち放しコンクリートの組み合わせ、というのが旭川の公共建築でよく取り入れられていますが、それを継承しているのが一つの特徴だと思います。

高橋　私たちがこつこつ積み重ねた結果が、旭川スタイルとして後世にも引き継がれていったらいいですね。

IA研究所では定期的に北欧への視察研修を実施している。2016年春の研修では、スウェーデン・フィンランド・デンマークを訪問。モダン建築の巨匠アスプルンドが設計したストックホルム市立図書館や20世紀を代表する建築家アルヴァ・アアルトのアトリエ、モダン様式の旗手として知られるヤコブセンの設計による集合住宅群などを視察した

いかにいい空間をつくるかが建築士の命題。後世に引き継がれるスタイルを創造する。

住民の意識が街並みをつくる 北欧視察で得たもの

―― お二人は北欧視察に行かれていますが、どのようなことを感じましたか。

高橋　最初に行ったのは2014年で、スウェーデンとデンマークに約1週間滞在しました。現地の建築家にガイドしてもらって、街を隅々まで見て歩いて。とにかくわくわくする経験でした。

佐々木　現地の人が案内してくれるので、すごく深い部分まで見ることができましたよね。例えばデンマークのコペンハーゲンは集合住宅が多くて、中庭が必ずあるのだけど、その空間の使われ方がとても豊かでした。自分たちで管理しながら、共用部分とプライベート部分をうまく使い分けているのには感心しました。

高橋　みんなが中庭をとてもきれいに使っていて、当たり前のように秩序が保たれているのには驚きました。

佐々木　デンマークではPTAの役員を募集するとみんなが手を挙げるそうです。住民のパブリックマインドが圧倒的に高く、日本との意識の違いが街並みにも出ているのだなと思いました。

高橋　これからの北海道で、私たちが建築で何ができるのかというヒントが北欧視察で少し見えた気がしましたね。

佐々木　地域の魅力ある暮らしをどうやってつくっていくのかと考えたとき、誰もがパブリックマインドを持って生活できるような仕組みづくりも必要なのだなと感じましたね。

北欧の建築の特徴の一つが、モダンな先進性と古い街並みの共存。コペンハーゲンの「8(エイト)ハウス」や「マウンテン」に代表されるように、デンマークでは都市開発によって斬新で実験的な集合住宅がつくられる一方で、古い建物の修復や既存の建物を利用した再開発なども進められている

風土や伝統を未来に引き継ぐ 建築が果たすべきこと

―― 建築はこれからどのようにあるべきだと思いますか？

佐々木　これまではつくったものを壊して、またつくることの繰り返しでしたが、これからはあるものを改修して使い続けていくことが当たり前になると考えています。

高橋　今、旭川市庁舎を残そうという運動があります。歴史的な建築物を引き継ぐのは、都市としての深みをつくる上でもとても大切なことだと思いますね。

佐々木　設計側からすると、更地にして新しいものを建てた方が簡単です。でも、環境面からも、既存のものを直して使うという方向に向かわざるを得ないと思います。

高橋　北欧では窓の木枠一つ一つまで、丁寧に補修しながら使い続けていて、見習うべきことが多いと感じました。

佐々木　これから地域はどんどん小さくなると言われていますが、それを前向きに捉えようと。私たちが関わる地域は、少子高齢化という意味ではおそらく世界最先端。そこでいかに美しく小さなコミュニティをつくっていくか。建築に携わる者として、そういうチャレンジも必要になるだろうと思います。

―― 最後に、理想とする建築とは何でしょう？

高橋　限定された目的を持った場所ではなく、生活の一部として存在する建物とでもいうのでしょうか。地域のいろいろな人が交流できるような空間があちこちにできたらおもしろいですね。

佐々木　同感です。あえて用途を決めない、無目的な建物。それでコミュニケーションが広がる場所。地域の人たちがその建物を育てていってくれるような。

高橋　設計側の意図から外れていったとしても、そこを使う人たちにとっていい方向であれば、そこで新しい展開があるのかなと。

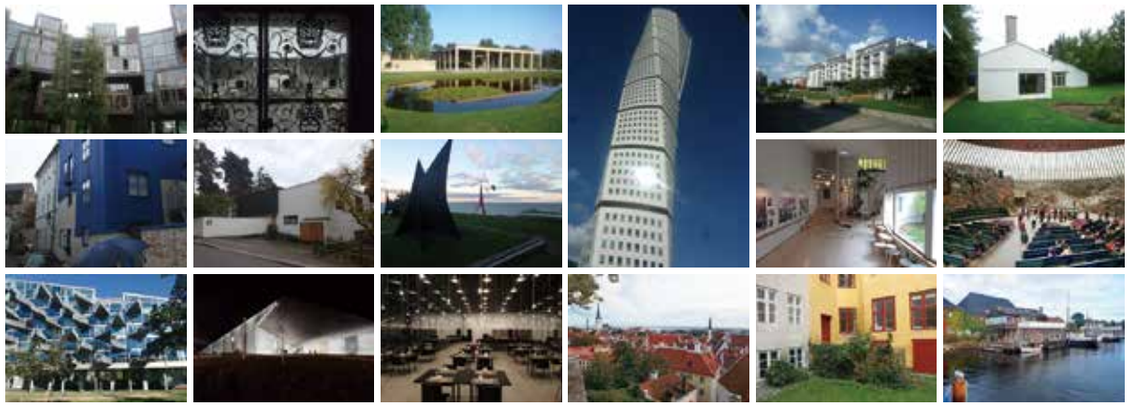
佐々木　人と人の距離感をコントロールするのが設計の仕事。人があってこその建築ですからね。

人々の暮らしとともに建築を考える

「コペンハーゲン中心部から電車で北へ約1時間。豊かな緑、青い海、透き通った空気……、清々しい自然に囲まれた環境にあるのが、“世界一美しい美術館”と称されるルイジアナ現代美術館です。単に美術作品を見せるのではなく、芸術と人、人と自然、自然と芸術が見事なまでに調和した空間がそこにはあります。ガラスを多用した建築は、外からも中からも身近に自然を感じることができ、あちらこちらに外と行き来ができる扉やテラスが設けられていて、美術館自体が自然の中に融け込んでいるようでした。この写真はその特徴がよく表現された1枚です。ガラススクリーンに映し出される自然の景色とジャコメッティの作品が融和した空間は、視覚を通して身体中にその感動が浸透していくような心地よさでした。芸術は特別なもの、という枠にとらわれることなく、ただ純粋に“時”を楽しむという豊かな空間を体感することができました」

高橋 義光

株式会社IA研究所専務取締役。一級建築士。旭川市出身。北海道東海大学芸術工学部卒業。1991年IA研究所入社。旭山動物園の獣舎を含む多数の施設や旭川調理師専門学校などの設計・工事監理を担当



「この空間に足を踏み入れたとき、いつの間にか私の目から涙があふれこぼれてきました。建築に触れて涙を流すほど感動したのは初めての経験でした。これはヨーン・ウツソン設計のバウスヴェア教会です。コペンハーゲン中央駅から電車で30分程度、最寄りのバウスヴェア駅より徒歩10分ほどの都市公園の一角に立っています。外観は簡素なモダン建築といったイメージですが、中に入るとガラス天井の廊下によって礼拝堂へと導かれ、祭壇の方を振り向くと、写真のようなハイサイドライトからの柔らかな光が礼拝堂全体へと広がる神々しい空間が現れます。この空間の感動を言葉で伝えるのは難しいのですが“神のいる空間を表現する”とはこういうことなのだろうと感じました。この教会は礼拝堂以外の諸室も含め、建物全体に光や空気を大胆かつ繊細にデザインすることで、人の心に響く建築物に昇華させていることに感銘を受けました」

佐々木 司

株式会社IA研究所常務取締役。一級建築士。礼文町出身。北海道東海大学芸術工学部卒業。専門学校教員などを経て2003年IA研究所入社。美瑛町図書館、旭川デザインセンターなどの設計・工事監理を担当

悠久の大地の営みを肌で感じ
生命の息吹にインスパイアされる

野生生物の聖地 東アフリカへの視察旅行

ものづくりにはさまざまなアプローチの仕方がある。想像力を膨らませたり、見聞きしたことを具現化したり、対象となるものをつぶさに観察したり……。経験や知識を積み重ね、自分の感性をいかに豊かにできるかが、クオリティーを高める鍵になる。

IA研究所は旭山動物園が整備計画を進める「アフリカ生態園」の基本構想から携わってきた。2012年に実施設計の概要が発表されたが、それに先立つ2011年に東アフリカへの視察旅行を実施。アフリカの気候や風土を肌で感じると同時に、そこに生きる野生動物たちの姿を実際に見ることで、新施設の設計に生かそうというのが狙いだった。

視察地のケニアで目にしたのは野生動物たちが優先されて生きる世界だった。生息エリアは法律で守られ、人や文明社会との住み分けが自然にできるように工夫されていた。「人類発祥の地」とされるアフリカでは、はるか昔から人と野生動物が共存してきたことを実感した。

心に残ったのは、大自然の中で悠々と生きる野生動物の姿だ。サンブル国立保護区で見た大型草食獣たちの圧倒的な存在感。生と死が常に隣り合った環境。ナイトサファリで間近に感じた野生の息づかい。アフリカの大地で体感したことが、アフリカ生態園の基本構想や「きりん舎」「かば館」といった新施設の設計に生かされた。

アフリカへの視察旅行は、今後IA研究所がものづくりを進める上でも、とても貴重な経験となった。価値観の多様性や自然との共生といったテーマにつながるヒントもあった。自分の目で見て肌で感じることの大切さに、改めて気づかされた視察旅行だった。

［IA研究所　海外研修・視察・調査の記録］

- ●1991年
  北欧視察旅行（スウェーデン・デンマーク・フィンランド）11/6〜11/15
- ●1992年
  ハワイ視察旅行（ホノルル）10/8〜10/12
- ●1994年
  香港・マカオ視察旅行（香港・マカオ）12/15〜12/20
- ●1997年
  ハワイ視察旅行（ホノルル）10/31〜11/4
- ●2004年
  中国視察旅行（上海・北京・ハルビン）5/10〜5/18
- ●2009年
  ボルネオゾウレスキューセンター予定地視察（マレーシアボルネオ島／ボルネオへの恩返しプロジェクト）3/24〜3/31
- ●2011年
  ボルネオゾウレスキューセンター視察・現地打ち合わせ（マレーシアボルネオ島／ボルネオへの恩返しプロジェクト）6/26〜6/30
  東アフリカ視察旅行（ナイロビ・サンプール・スウィートウォーター・アバーディア）8/27〜9/3
  イタリア研修旅行（ミラノ・ベローナ・ベネチア・フィレンツェ・ピサ・ローマ・カプリ）10/28〜11/3
- ●2012年
  ボルネオゾウレスキューセンター現地調査・打ち合わせ（マレーシアボルネオ島／ボルネオへの恩返しプロジェクト）9/1〜9/6
- ●2013年
  ボルネオゾウレスキューセンター開所式（マレーシアボルネオ島／ボルネオへの恩返しプロジェクト）9/6〜9/21
- ●2014年
  米国西海岸研修旅行（シアトル・サンフランシスコ・ラスベガス・ロサンゼルス）2/19〜2/27
  北欧研修旅行（デンマーク・スウェーデン）9/8〜9/16
- ●2015年
  米国東海岸研修旅行（ワシントンDC・モーガンタウン・フィラデルフィア・ニューヨーク）4/22〜4/30
- ●2016年
  北欧三国研修旅行（フィンランド・スウェーデン・デンマーク）4/25〜5/4
  北欧研修旅行（デンマーク・フィンランド・エストニア）9/26〜10/6
- ●2017年
  米国東部研修旅行（ボストン・ニューヨーク・シカゴ）5/19〜5/28

左）ナイロビ国立博物館では人類の起源とされるアウストラロピテクスの化石などを見学した

右）自然との調和が図られた宿泊先のロッジ。美しい野鳥や小動物が庭先に姿を見せていた

Inspection

動物 とともに 環境 を考える

動物と一緒に生きる未来を考えてもらう。
そこに動物園の存在意義がある。

動物園園長の思い、考え

旭川市旭山動物園
Asahiyama Zoo

園長 坂東 元さん
Gen Bando

動物たちが本来持っている能力を生かした「行動展示」で
日本の動物園に革命をもたらした「旭山動物園」。
中心となってプロジェクトに取り組んできた坂東元さんは
今も生命と向き合いながら、動物園としての使命を追求している。

どんな生命にも意味がある
動物たちが教えてくれたこと

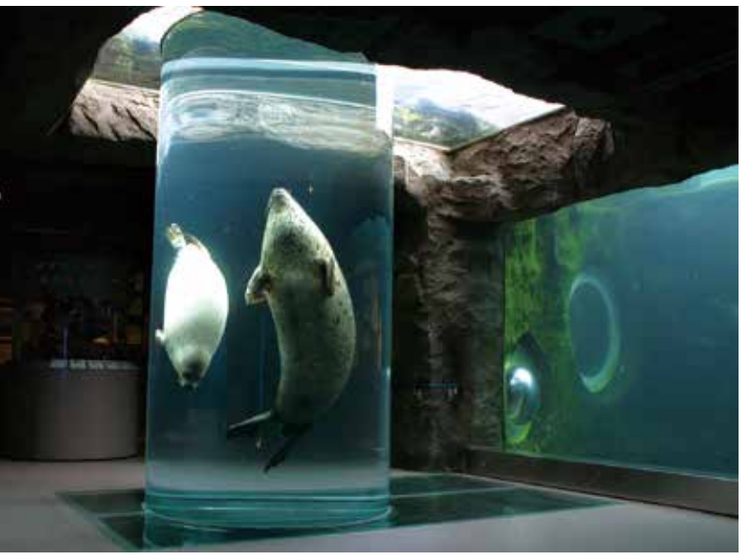
動物たちの個性を引き出す行動展示など、ユニークな取り組みによって注目を集めてきた旭山動物園。画期的ともいえるプロジェクトを次々に仕掛けてきたのが、現在園長を務める坂東元さんだ。

坂東さんが獣医師を目指したのは、10代の頃に飼っていたセキセイインコの死がきっかけだった。小さな命の訴えや思いに応えてやれない悔しさを感じ、どんな動物でも診られるようになりたい、と獣医学部に進学。多くの命と接するうちに「生きるとは何だろう」と考えるようになった。

「生きるのはきれいごとではなく、他の生き物の命を奪わないと生きていけない。だから、どんな命も無駄にしてはいけないのだと気づきました」。

旭山動物園の獣医として勤務することになったとき、坂東さんは動物園に対していい印象を持っていなかった。「動物をコンクリートのおりの中に閉じ込めて、見せることに共感できませんでした。人のエゴの究極形だと思っていました」。

ところが、動物たちは飼育下にあっても野生の本能を失わず、精一杯に生きていた。特に坂東さんが衝撃を受けたのが、淡々と静かに死んでいく動物の姿だった。「僕は死を否定的に見ていて、獣医は生命を救うことが使命だと思っていました。でも動物たちは自分の死をちゃんと迎え入れて死んでいく。その姿を見て自分の思い上がりを知りました」。



旭山動物園では、ときには来園客の方が動物たちから見られる側になる。人間の予想外の動きが動物にとっていい刺激になることから、来園客を興味の対象として見られるような環境づくりをしている

獣舎をつくるうえで重視したのが「立体的に見せる」ことだった。頭上を飛び回るように泳ぐペンギンの姿がインパクトを与えた「ぺんぎん館」など、スタッフのアイデアをできるだけ生かしながら、ユニークな施設がつくられていった

動物の真の姿を伝えたい
手探りで始めた取り組み

坂東さんが就職した頃の旭山動物園は入園客が減り、存続が危ぶまれるような状態だった。

「つまらない動物ばかり」という評価を覆そうと始めたのが、飼育員によるワンポイントガイドや手作りの看板だった。

「アザラシが水に潜ったまま出てこないのを見たお客さんから『アザラシが死んでいる』と言われて。そこで時計を設置して“何分潜れるかな”と書き添えたところ、みんなが興味を持って見てくれるようになりました。伝え方を工夫することで、動物の能力のすごさに気づいてもらえたのです」。

坂東さんにとって大きな転機になったのが、勤務2年目に行ったヨーロッパの動物園視察だった。その当時、海外に行くにはかなりの費用がかかったが、坂東さんは借金をしてまで参加。そこで目の当たりにしたのは動物園に対する考え方の違いだった。

「パンダやコアラといった人気動物は豪華な設備の中にいて当然、と思っていたのですが、ヨーロッパでは普通のクマと並んでパンダがいた。どの動物も特別扱いされることなく、質素な獣舎にいることに驚きました」。

そうした若いときの経験が、その後の旭山動物園の方向性を考える上で重要なベースになっていった。

生き生きと輝く生命の魅力
感動を与える行動展示

旭山動物園を語る上で欠かせないのが「行動展示」だ。動物をただ展示するのではなく、特徴的な行動を引き出すことによって魅力に気づいてもらい、見る人に感動を与えるという取り組みによって、旭山動物園の名前は全国に知られるようになった。

例えば「さる山」は、ぐるりと全方位を見せるようにし、高低差をつけることで、いろいろな角度から、多様なサルの行動を観察できるようにした。また、名物になった「ペンギンの散歩」も、ペンギンが持つ習性を生かした展示方法だった。

「衝撃的と言われたのが、『あざらし館』でした。円柱水槽を上へ下へと通り抜ける姿は、ただ泳ぐだけ、と思われていたアザラシのイメージをがらりと変えました」と坂東さんが言うように、動物たちが本来持っている能力は見る人の心をつかんだ。

旭山動物園は豪華な設備や広い獣舎があるわけではない。予算にも限りがある。しかし、坂東さんたちの熱意と工夫が、これまでにない動物園を実現させた。

旭山動物園にはいくつかの決まりがある。動物を擬人化しないこと。動物に芸をさせないこと。動物の尊厳を傷つけないこと。「動物園で生きる動物は、人々に生物の多様性や共存の大切さを教えてくれる。だからこそ、その動物らしくないといけない」と坂東さんは力を込める。

旭山動物園の中心に位置する「さる山」。切り立った人口岩や高さ14メートルの擬木、水辺や遊具などを配置し、ニホンザル本来の活発な動きを引き出すようにした

坂東さんの言葉には、動物への限りない愛情と敬意がにじむ。「積み重ねてきた知識や経験をどのように社会に還元するのか。そして動物たちにどうやって恩返しをしていくのか。それを考えるのが動物園で働く者の責任だと思います」

「エゾシカの森」は「オオカミの森」の向かいに配置されている。草食動物にとって逃げるというのは根源的な本能であり、何かの瞬間に感じる緊張関係は動物にとってプラスのストレスになるという考えから、あえて近づけてレイアウトした

「オオカミの森」では、遠吠えをするオオカミの姿が見られることがある。「100年前は本当にここでオオカミが吠えていたのかもしれない。そう思うと、想像をかきたてられませんか」と坂東さんは楽しそうに話す

動物の生息環境を知ることが未来につながっていく

「動物園は何のためにあるのか」。坂東さんが何度も口にした言葉だ。世界の自然環境が激変し、10年先にどれだけの野生動物が生き残っているかも見えない今、動物園は自分たちができることを考えなければならない。人が作ったものなら直せるが、失われた動物は取り戻せない。多様な生き物が一緒に生きていける未来を見つけるためにも、動物園は動物の生命や生きる環境について考えてもらう窓口としての責任を果たすべき。そうした理念が旭山動物園の活動の根拠になっている。

旭山動物園では、生き物の生命や生態、生物多様性や生息環境などについて子どもたちに考えてもらう教育活動を重視している。また、「ボルネオへの恩返しプロジェクト」として、ボルネオ島に暮らす野生動物たちの生息環境の保全や保護施設の建設にも取り組んでいる。

「動物園とは何か」という答えを追求してきた坂東さんは、これからの旭山動物園が目指すべき姿をこう話す。「動物たちがどういう環境で暮らしているかを感じて、想像してもらえる場所でありたいと思います。当園を訪れた人に感動を与えられて、動物たちが暮らす自然についても関心を持ってもらえれば。僕たちが知ったことを社会に還元することが、未来につながっていくと考えています」

Profile
坂東 元さん

旭川市旭山動物園園長。獣医師。ボルネオ保全トラストジャパン理事。酪農学園大学卒業。1986年より旭山動物園に勤務。動物たちのありのままの生態を見せる「行動展示」などに取り組む。2009年より現職

野生動物の生息環境を守り
共生できる未来を目指す

ボルネオへの恩返しプロジェクト

野生生物レスキューセンターで使用するゾウの檻の設計はIA研究所が担当した。ゾウが鼻を巻き付けにくく、大きな力がかかっても壊れにくいデザインと強度、現地での運搬や設置しやすさに配慮したパーツ式など、さまざまな条件を想定しながら設計が行われた

IA研究所は野生生物レスキューセンターの模型製作にも協力。現地での測量ができなかったため、衛星画像から作成した等高線をもとに、建物や変化に富んだ地形、周辺に広がる森などを精巧につくり込んでいった

野生動物と人間の共存を図るボルネオ保全活動をサポート

200種を超える多様なほ乳類が生息するマレーシア・ボルネオ島。60年代から進められてきた大規模な熱帯雨林の伐採や、アブラヤシプランテーションの開発によって、稀少な野生動物たちが絶滅の危機にさらされている。

こうした事態をくい止め、野生動物と人間の共存を図ろうと、2006年に現地で設立されたのが「ボルネオ保全トラスト（BCT）」だ。日本では「NPO法人ボルネオ保全トラスト・ジャパン（BCTJ）」が窓口となり、現地と連携した活動を行っている。旭山動物園では、オランウータンのふるさとでもあるボルネオ島の保全活動を支援するために、2010年からBCTJと協働し「ボルネオへの恩返しプロジェクト」を開始した。

ボルネオ島の固有種であるボルネオゾウは、アブラヤシを食べる害獣とみなされ、殺されたり、傷つけられたりすることで数を減らしている。プロジェクトではこのボルネオゾウを一時的に保護する「野生生物レスキューセンター」の設立に取り組んでいる。賛同する企業や有志からの寄付金、売り上げの一部が建設資金に充てられるボルネオ支援自動販売機、協賛企業による技術支援など、多くのサポートを得て2013年に1期工事が完了。その後、パドックの屋根工事や水道を引く工事などを追加で行い、15年から正式運用が始まった。

野生生物レスキューセンターの第1期工事では、ゾウのパドックとレスキュー活動ができる設備を建設。傷ついたゾウなどを自然に近い環境で保護し、森に戻すための取り組みが行われている

多様な命を未来につなぐために私たちができること

野生生物レスキューセンターをつくる活動を通じて、環境問題や生物多様性について考えるきっかけとなることも、プロジェクトの狙いになっている。例えば、ボルネオ島のアブラヤシから作られるパーム油は、世界で最も消費されている植物油だ。私たちがその恩恵を受ける一方で、ボルネオ島の野生動物たちは森を追われ、暮らす場所を失っている。ボルネオ島で起きている問題は、私たちの生活と密接につながっているのだ。プロジェクトでは、将来的にはほかの野生動物の保護施設や、病院・研究所なども設立し、世界のモデル施設になることを目指している。

旭山動物園で私たちを楽しませ、優しい気持ちにしてくれるオランウータンたち。「ありがとう」という感謝の思いを、彼らのふるさとを守るというかたちで恩返しする。一人一人の小さな意思が、たくさんの命を未来につなぐ架け橋となるように。動物園の使命の一つとして、旭山動物園の「ボルネオへの恩返し」は続いていく。

BCTJでは、「ボルネオへの恩返しプロジェクト」のほかに、分断された野生動物の生息地を結び生息地をつなげる「緑の回廊プロジェクト」、オランウータンが川を渡るための吊り橋をつくる「オランウータンの吊り橋プロジェクト」、ボルネオの現状を伝えるための環境教育などを行っている

●特定非営利法人
ボルネオ保全トラスト・ジャパン（BCTJ）
http://www.bctj.jp　E-mail info@bctj.jp

Coexistence

星とともに宇宙や時間を考える

昼間の星は、私たちに
目に見えるものが
すべてではないと教えてくれる。

理論物理学者の思い、考え

丘のまち郷土学館「美宙」
Misora Observatory

天文台台長 佐治 晴夫さん
Haruo Saji

2016年に美瑛町にオープンした「丘のまち郷土学館 美宙（みそら）」は
昼間でも星が見られる反射望遠鏡を備えた天文台が併設されている。
宇宙物理学の権威であり、天文台台長を務める佐治晴夫さんに、
宇宙や時間の不思議について考えることの意味を聞いた。

挫折を繰り返し「なぜ」を追求する物理の道へ

美瑛町の郷土や自然、天文を学ぶ施設としてつくられた「丘のまち郷土学館 美宙」。併設の天文台台長として、来館者に宇宙や星のことをわかりやすく解説しているのが佐治晴夫さんだ。

宇宙物理学や理論物理学の権威とされる佐治さんだが、「もともとは音楽家に憧れていた」と話す。幼少期に音楽の持つ輝きや美しさに夢中になり、一時期は真剣に音楽家になることを考えた。「戦時中、日本橋三越にパイプオルガンの演奏を聞きにいったことがありました。軍服を着たオルガニストの奏でるバッハの旋律が心に残り、それが音楽への憧れをいっそう強くしました」。

しかし、音楽の専門的な教育を受けていなかった佐治さんは、自分には音楽大学に合格できるような才能がないことに気づく。それが第一の挫折だった。

佐治さんは次に、「音楽と感覚が共通している」ことから数学の道を目指した。ところがそこでも苦い思いをすることになる。「周りは数学にかけては天才的という人物ばかり。日常でもこちらの発想を超えるような行動をする。彼らの常識との差を思い知らされて、数学科は卒業したものの数学者の夢もあきらめました。思い返せば、若い頃は挫折の連続でした」。

そこで佐治さんは数学の知識を生かすことができる物理の道を選択する。幼い頃から、わずかな事象にも「なぜ」と疑問を感じ、探究心の強かった佐治さんにとって、物理の世界に進んだことがその後の活躍につながった。

物理学から天文の世界へ「ゆらぎ」が持つ不思議

佐治さんは「僕にとって物理や数学はポエム（詩）と同じ」だという。それは、佐治さんが物理や数学の中に芸術的な香りを感じたからだ。その感性は天体の動きや宇宙の不思議にも向けられていった。物理の研究から理論天文学の世界に足を踏み入れた佐治さんは、「無のゆらぎ」から宇宙が誕生したという「ゆらぎ理論」の第一人者となっていく。

物理や宇宙の研究を続ける一方で、佐治さんは実用的な技術の開発にも携わった。なかでも有名なのが、ゆらぎを利用した家電製品の開発だ。当時、東京大学物性研究所と松下電器東京研究所を掛け持ちしていた佐治さんは、ゆらぎ現象を家電製品に応用することを思いつく。

「山の風や、海辺の風は心地よく感じますよね。それは自然風に、宇宙が無から生まれたときのゆらぎがあるからなのです。そこで、扇風機の風にゆらぎを付けた“1/fゆらぎ扇風機”を開発しました」。ほかにも、家庭用ビデオの「VHS3倍モード」の開発など、ゆらぎ理論を用いた製品開発において主導的な役割を果たし、技術の発展に貢献した。

研究者としての佐治さんを突き動かしていたのは持ち前の探究心だ。佐治さんはプラトンの“洞窟の比喩”を用いてこう話す。「私たちが普段見ているものは、実は光に幻惑された真理の影に過ぎず、それを真理だと思い込んでいる。そこからどうやって本当の真理にたどり着くかが重要なのです」。

美宙の内装は美瑛町の地域性を表現するため、倉庫などで使われていた美瑛軟石を再利用し、天井や壁には美瑛産のカラマツ材がふんだんに使われている。自然や歴史、農業の歩みがわかる展示スペース、情報検索や自主学習ができるコーナー、学習体験室などがあり、幅広く「美瑛学」を学べる場所となっている

見えないものの存在を知る 昼間の星を見ることの意味

佐治さんはかねて「昼間の星」を見ることを提唱してきた。「サンテグジュペリの『南方郵便機』の冒頭に書かれていた、“空が（中略）星を現像していた”という表現に心を惹かれました。そして、嵐の後の青空で光り輝く金星を肉眼で見たことに感動し、昼間の星にとりつかれてしまったのです」と佐治さんは愛おしそうに話す。

昼間の星に注目するようになった佐治さんは玉川大学から教授就任を打診された際、天文台の設置を提言。その頃から、昼間の星を見る活動に力を注ぐようになる。

「金子みすゞの詩『星とたんぽぽ』の“昼のお星はめにみえぬ。見えぬけれどもあるんだよ”という一節に感銘を受けました。目に見えるものがすべてではなく、見えないものの存在に気づくことが大切なのだ。これこそが教育だ、と感じました」。

美宙の天文台は、佐治さんの提案を受けて、昼間に星を観測できるようになっている。町の中心部にあるため気軽に立ち寄る町民や観光客も多い。佐治さんは「そこに美宙の意義がある」と話す。「天文に興味のない人でも気軽に空を見ることができる。そして、昼間でも多くの星があることに気づく。そうした発見や驚き、不思議だと思う心が大切なのです。ここは訪れる人を宇宙の旅、知の冒険へと誘うゲートウェイ（玄関）だと考えています」。

Profile
佐治 晴夫さん

理学博士。東京都出身。鈴鹿短期大学名誉学長・名誉教授。東京大学物性研究所、NASA客員研究員、玉川大学教授などを経て、2016年より丘のまち郷土学館美宙天文台台長。宇宙の創生に関わる「ゆらぎ」研究における第一人者。「からだは星からできている」（春秋社）、「ぼくたちは今日も宇宙を旅している」（PHP研究所）など著書多数

実在するのは「現在」だけ だから今を大切に生きる

美宙で解説するとき、佐治さんは単に物理的な性質や大きさ、距離などを説明するのではなく、宇宙を身近に感じてもらえるようなエピソードを交えて話す。例えば太陽の解説はこうだ。「太陽の直径は約140万キロメートルもあって、中の圧力はものすごく高いので、中心部で生まれた光の赤ちゃんが表面に出てくるのに約7000年もかかります。そしてそこから8分20秒で地球に達します。今受けている太陽の光は7000年前にできたのですよ」。

また、七夕のときはベガを見せながら、「織姫星と地球の距離は27光年です。27年前に出た光が、今あなたと出合ったのです」と語りかけた。想像をかきたてる佐治さんの解説を聞いて「もっと早く先生と会いたかった」と感激されることも多く、それが佐治さんにとっての生きがいになっている。

佐治さんは、数多くの著作やインタビューなどを通して、社会にメッセージを発信し続けている。心を揺さぶられるのが「これからがこれまでを決める」という言葉だ。

「過去・現在・未来はあるのか、と考えたとき、過去は記憶の中のものであり過去そのものでない。未来はまだきていないからわからない。存在するのは今だけだとすれば、これからはどのようにでもできる。そしてこれからをどう生きるかで、これまでが決まるとも考えられるのです」。

昼間の空で輝く星のように、佐治さんの言葉は聞く人の心に明かりを灯し、生きることの意味に気づかせてくれる。

美瑛町のアトリエで趣味のピアノを演奏する佐治さん。1977年に打ち上げられた宇宙探査機ボイジャーに積まれているゴールデンレコードには、当時NASAの客員研究員だった佐治さんの提案で、バッハの平均律が収められている

美瑛町では美しい街並みをつくるため、建築協定の策定などに取り組んできた。美瑛町図書館は内装に美瑛産のカラマツ材と美瑛軟石、外装にレンガを使用。緩やかな曲線や大きくとった開口部が空間の広がりを感じさせる

Consideration

ことばを伝える。思いを文字にする。「文章を書く」仕事について考える。

編集者やライターが「文章」を扱うとき
何を求められ、どのような意義があるのだろう。
ことばや思いを文字にして伝える仕事について
あらためて考えてみた。

株式会社みんなのことば舎

ことばの奥底にある思いをかたちにする
—— ライターの仕事

日常のいたるところで目にする文字。新聞や雑誌、書籍、ホームページ、広告や広報誌の類いから商品に添えられた小さなコピーに説明書きの果てまで、そのほとんどに編集者やライターといった、いわゆる“文章のプロフェッショナル”が関わっている。ただ単純に日本語の文章を書くのであれば誰でもできそうなものを、わざわざ「文字を生業とする」人たちが手掛けているのだ。

編集者が立てた制作物のコンセプトや企画に合わせて、ライターはリサーチや取材などを行い、意図する内容をより的確に伝えるための文章表現を考える。ライターの中には個人的な意見や考え、趣味嗜好を世の中に発信する人もいるが、それはどちらかというとエッセイストや作家に近い。そうした人たちですら、掲載するメディアに適した作品を提供していると考えれば、文字に携わる人の多くが、クライアント（発注者）の意向を受け、その先にいるターゲット（読み手）に向けて文章をつくっていることになる。

文章のプロに期待される価値とは何か。内容が正確で読みやすくわかりやすい文章であることは当然として、読み手の想定年齢やニーズに合った表現、掲載スペースに適した文字量、写真やイラストとのバランスなど、全体を俯瞰した上で構成された文章をつくることができるのがプロのライターとしての条件だろう。

そして本書のような取材記事を作成する場合に何より大切なのは、取材対象が口にしたことばや表面に現れている事象だけを捉えるのではなく、その奥底にあるもの、ことばにできない思いまでくみ取り、それを文字というかたちにすることだ。ときには初対面の人の人生にまで踏み込み、一緒に笑ったり悲しんだりしながら話を聞くこともある。そのときにどれだけ相手の心の深部に近づくことができるかで、文章の持つ重みや輝きが変わってくる。

手間隙をかけさえすれば良い文章ができる、というわけではない。誠実にものごとを伝えようという姿勢が文章に表れてくる。だから文章のプロたちは今日も、きっと誰かの心に届くと信じて、文字と向き合い続けている。

スタッフやクライアントと共にものづくりの過程を楽しむ
—— 編集者の仕事

編集者の仕事の醍醐味とは何か、という問いに一言で答えるのは難しい。なぜなら、その業務内容は、非常に多岐にわたるからだ。それぞれの制作物に合ったコンセプトや企画の立案、デザイナーやカメラマンなどのスタッフとの打ち合わせ、取材先との調整や種々の手配、ライターが作成した原稿のチェックや校正、こまごまとしたスケジュールや予算の管理……。その間に、クライアントがいる場合は打ち合わせを繰り返し、制作物の方向性を擦り合わせる。文字に携わる職業とはいうものの、実際には一人で何役もこなす必要があり、裏方的な作業も多い。しかし、どんな苦労や困難があってもこの仕事を続けていけるのは、ものづくりの楽しさを知っているからだ。さまざまなスタッフと協力し、ビジョンを共有しながら一つのものを創り上げていく喜びは、次のステップへと向かう原動力になってくれる。

そういう意味では、建築における設計の仕事と編集（出版物やwebサイトなどをつくる）の仕事は、規模の違いはあるものの共通点が多いことに気づく。クライアントとコミュニケーションを図りながらニーズをくみ取ってプランに反映し、さまざまなスタッフをまとめながらいかにスムーズに作業を進めるか腐心する。クライアントの要望を尊重しながらも、プロフェッショナルの立場からより良い選択肢を提案し、許された予算や期間の範囲内で最善の結果を目指す。少しずつかたちが出来上がっていく過程のわくわくする気持ちや、無事に完成したときの達成感・安堵感も、ものづくりに共通する楽しさなのではないだろうか。

最後に、本書『ともに考えるシゴト』の制作にあたり、各界で活躍する人たちに話を聞く機会に恵まれた。“仕事”を切り口に、これまでの人生や生きる上でのポリシー、社会へのメッセージなど幅広く語っていただいたが、すべての方に共通していたのは、自分の仕事に対して深い愛情と誇りを持っていることだった。働くことへの希望と未来への示唆に富んだ彼らのことばや思いの熱量が、本書に掲載された文章を通して少しでも伝わればと思う。

Writing and Editing

【教育施設】

登場ページ → P18-19

旭川調理師専門学校

2012年　北海道旭川市
用　　途　専門学校
建築面積　566㎡
延床面積　1,388㎡
構　　造　鉄筋コンクリート造
階　　数　地上3階

登場ページ → P23

東川小学校・地域交流センター

2014年　北海道上川郡東川町
用　　途　小学校・集会場
建築面積　11,336㎡
延床面積　10,922㎡
構　　造　鉄筋コンクリート造・鉄骨鉄筋コンクリート造・鉄骨造・木造
階　　数　地上2階
アトリエブンク共同企業体

登場ページ → P23

東川町幼児センター「ももんがの家」

2001年　北海道上川郡東川町
用　　途　保育所・幼稚園
建築面積　3,087m²
延床面積　2,840m²
構　　造　鉄筋コンクリート造
階　　数　地上1階

【宿泊施設】

登場ページ → P15

ガーデンヴィラ

2012-2016年　北海道上川郡上川町
用　　途　ヴィラ
建築面積　82㎡（ヴィラA・B）、74㎡（ヴィラC）、120㎡（ヴィラD）
延床面積　67㎡（ヴィラA・B）、84㎡（ヴィラC）、110㎡（ヴィラD）
構　　造　木造
階　　数　地上1階（ヴィラA・B、D）、地上2階（ヴィラC）

【商業施設】

登場ページ → P12-14

ガーデンレストラン フラッテロ・ディ・ミクニ

2012年　北海道上川郡上川町
用　　途　レストラン
建築面積　304㎡
延床面積　456㎡
構　　造　木造一部鉄筋コンクリート造
階　　数　地上1階　地下1階

登場ページ → P25

大雪森のガーデン

2013年　北海道上川郡上川町
用　　途　カフェ・ショップ
建築面積　257㎡（カフェ）、201㎡（ショップ）
延床面積　202㎡（カフェ）、109㎡（ショップ）
構　　造　木造
階　　数　地上1階

【文化・交流施設】

登場ページ → P28

北彩都ガーデンセンター

2014年　北海道旭川市
用　　途　公園管理棟
建築面積　418㎡
延床面積　381㎡
構　　造　木造
階　　数　地上1階

登場ページ → P20-22

東川町文化ギャラリー

1989年　北海道上川郡東川町
用　　途　展示施設
建築面積　986m²
延床面積　875m²
構　　造　鉄筋コンクリート造
階　　数　地上1階

登場ページ → P33-35

旭山動物園

さる山　1998年、ぺんぎん館　1999年、
ほっきょくぐま館　2001年、
あざらし館・休憩所　2002年、
正門　2004年、おらんうーたん館　2004年、
チンパンジーの森　2005年、
レッサーパンダ・ホッキョクギツネ舎　2007年、
オオカミの森　2007年、エゾシカの森　2008年、
てながざる館　2009年、
きりん舎・かば館　2013年

登場ページ → P38-41

丘のまち郷土学館「美宙」

2016年　北海道上川郡美瑛町
用　　途　郷土資料館・天文台
建築面積　314㎡
延床面積　533㎡
構　　造　木造一部鉄筋コンクリート造
階　　数　地上2階一部3階

登場ページ → P41

美瑛町図書館

2012年　北海道上川郡美瑛町
用　　途　図書館
建築面積　1,177㎡
延床面積　1,098㎡
構　　造　鉄筋コンクリート造
階　　数　地上1階

長原 實氏
Nagahara Minoru

1935年　東川町生まれ
1951年　旭川公共職業補導所木工科卒業
1986年～1991年
株式会社IA研究所　代表取締役

10代半ばから旭川の家具産業に携わり、西ドイツへの技術研修生派遣などを経て、1968年に株式会社インテリアセンター（現・株式会社カンディハウス）設立。旭川家具の発展に尽力するとともに、ものづくりに携わる人材育成の大切さを提唱し、晩年は「人づくり一本木基金」創設などに取り組んだ。全国家具工業連合会（現・日本家具産業振興会）会長、旭川家具工業協同組合会長等を歴任。ものづくり産業の振興に対する貢献が評価され2012年北海道功労賞受賞。

長原 一幸氏
Nagahara Kazuyuki

1950年　東川町生まれ
1968年　旭川工業高等学校建築科卒業
1991年～2002年
株式会社IA研究所　代表取締役

主な作品にインテリアセンター（現・株式会社カンディハウス）社屋、東川町総合文化ギャラリー、音威子府村診療所及び保健福祉センター、中頓別保育所・こどもセンター、天塩町立天塩中学校など。卓越した建築の知識とデザインセンスを持ち、IA研究所の草創期を支えた。「インテリアとアーキテクチャが一体となった機能的な建築デザインの追求」という創業の精神を引き継ぎ、強い責任感と誠実なものづくりへの姿勢で、長く人に愛される作品を残した。

細野 満則氏
Hosono Mitsunori

1950年　旭川市生まれ
1973年　東北工業大学工学部建築学科卒業
2002年～2010年
株式会社IA研究所　代表取締役

主な作品にインテリアセンター（現・株式会社カンディハウス）独身寮「オークハウス」、旭川市東豊公園運動施設、大雪消防組合美瑛消防総合庁舎、秩父別町立秩父別小学校、富良野自然塾闇の教室及びピクニックガーデン「風のガーデン」など。建築への情熱と才能を買われ、IA研究所設立に参加。「本物をつくる」というIA研究所の理念のもと、建築を芸術的な価値にまで高めることを目指した。従来の概念にとらわれない柔軟な発想で、社会から注目される作品を数多く手掛けた。

佐々木 雅敏
Sasaki Masatoshi

1959年　旭川市生まれ
1981年　北海道東海大学芸術工学部建築学科卒業
2010年～
株式会社IA研究所　代表取締役

主な作品に旭山動物園さる山・ぺんぎん館・ほっきょくぐま館、美瑛町図書館、上川町地域資源活用交流施設、学校法人浅井学園旭川調理師専門学校新校舎など。北海道建築士事務所協会旭川支部のまちづくり委員長として、旭山動物園の周辺整備に関する「環境教育施設整備構想」の作成、北の恵み食べマルシェに協力し子どもを対象にした「折り紙建築士」を行うなど、まちづくりの視点から社会活動に参加。ものづくりの楽しさ、建築に携わる喜びを社員と共有しながら、新たな発想や価値観による建築作品の創造に挑戦し続ける。

WORKS

［主な作品と受賞歴］

※受賞作品は受賞した年を掲載しています

1986

IAシステムインテリアドア

IA研究所設立当時、株式会社インテリアセンターの代表取締役でもあった長原實氏の提案でオリジナルの住宅用室内ドアを開発。木の美しい素材感を生かし、空間や家具とのトータルコーディネートを可能にした。まだ設計や建築の仕事が少なかった創業時を支えた収入源でもあった。

1987

株式会社インテリアセンター社屋

1988

株式会社インテリアセンター新工場

いきいきマイタウン

［旭川市］ ●設計競技優秀賞・特選

1990

株式会社インテリアセンター独身寮オークハウス・北工場

1994

音威子府小学校

［音威子府村］ ●設計競技最優秀賞

新ひまわり団地公営住宅

［美深町］ ●さわやか公住賞

1995

天塩中学校

［天塩町］ ●設計競技最優秀賞

天塩町の文化的・美的な伝統や景観をデザインに生かし、外壁には天塩町のイメージカラーでもある「赤レンガ」を意匠的に使用。核となる多目的ホールや中廊下の吹き抜けには波形のトップライトを設け、海を表現した。また、地域のランドマークとなるよう、玄関ホール上部の8面体のトップライトには、日本海の四季を表したステンドグラスを施した。

1996

層雲峡小学校

［上川町］ ●設計競技最優秀賞

1997

大雪消防組合美瑛消防総合庁舎

［美瑛町］ ●設計競技最優秀賞

1998

音威子府村診療所及び保健福祉センター

［音威子府村］ ●設計競技最優秀賞

1999

かなやま湖観光開発に伴う温泉休養及び宿泊施設

［南富良野町］ ●設計競技最優秀賞

自然豊かな周辺環境との調和や人に優しいもてなしを意識した空間構成、やすらぎや開放感のある環境での健康増進、自然とふれ合い充実したときを過ごすための施設を提案。「森に浮かぶカヌー」をイメージした外観が高い評価を受けた。

2000

秩父別小学校

［秩父別町］ ●設計競技最優秀賞

2001

旭川工業高等専門学校校舎

［文部科学省］ ●プロポーザル最優秀賞

旭山動物園さる山

［旭川市］

●（社）日本建築士事務所協会連合会奨励賞

2002

中頓別保育所・こどもセンター

［中頓別町］ ●設計競技最優秀賞

2003

旭山動物園ぺんぎん館・ほっきょくぐま館

［旭川市］

●（社）日本建築士事務所協会連合会奨励賞

2004

東光図書館

［旭川市］ ●第5回旭川市景観賞「東光図書館と東光ふれあい公園」

「デザイン都市モデル形成事業」プロジェクトを導入し、北海道東海大学の協力のもと、「図書館と公園との一体的・融合的整備」をコンセプトに、地域にふさわしい施設づくりを提案。ワークショップによって地域住民とのコミュニケーションを重ね、隣接する公園の自然環境と融和した外観デザインや環境共生への配慮、図書館と公園をつなぐ中間領域の配置などによって、多様な魅力を持つ図書館をつくり上げた。

2005

美瑛町スポーツセンター

［美瑛町］ ●設計競技最優秀賞

2006

公営住宅緑町団地

［東神楽町］ ●プロポーザル最優秀賞

2007

旭川大学保健福祉学部棟

［旭川大学］ ●プロポーザル最優秀賞

特定公共賃貸住宅ひがしの団地

［愛別町］ ●プロポーザル最優秀賞

2008

旭山動物園（仮称）アフリカ生態園基本構想

［旭川市］ ●プロポーザル最優秀賞

2009

和寒小学校

［和寒町］

上川町公営住宅駅前団地B

［上川町］

●北海道地域住宅協議会北の地域住宅賞会長賞

2010

美瑛町図書館

［美瑛町］ ●設計競技最優秀賞

地域資源活用交流施設

［上川町］ ●プロポーザル最優秀賞

ひじり野西団地

［東神楽町］ ●プロポーザル最優秀賞

2011

共生型住まいの場「ぬく森」

［下川町］

夕張市道営住宅南清水沢歩団地

［北海道］ ●プロポーザル最優秀賞

旭川調理師専門学校新校舎

［北海道浅井学園］ ●プロポーザル最優秀賞

2012

当麻町公営住宅駅前団地

［当麻町］ ●第25回住生活月間功労者表彰 最高賞国土交通大臣表彰

市街地での快適な居住を推進する当麻町の基本計画に沿い、子どもから高齢者までが安心して暮らすことができる魅力的な団地を計画。環境負荷や維持・管理コストの低減、コミュニティを育む家庭菜園や花壇の設置、街中に続く歩行空間の配置、敷地内での堆雪空間の確保など、快適性や利便性、地域とのつながりを重視した。

2013

北彩都ガーデンセンター

［旭川市］ ●プロポーザル最優秀賞

2014

中川消防庁舎

［中川町］

特別養護老人ホーム長寿園

［中頓別町］ ●プロポーザル最優秀賞

2015

上富良野町町営住宅泉町南団地

［上富良野町］

東川小学校及び地域交流センター

［東川町］ ●北海道赤レンガ建築奨励賞

グループホームひだまり

［中川町］

建物中央のダイニングを囲むように個室を配し、さまざまな居場所を建物内に点在させることで共同生活を楽しいものにしている。また、入居者が安心して生活を営むことができるように、ユニバーサルデザインの視点に立った住環境づくりが行われている。

2016

東旭川学校給食共同調理所及び厨房設備選定

［旭川市］ ●プロポーザル最優秀賞

調理室のゾーニングや厨房設備の配置、動線計画などによって汚染を防ぎ、衛生管理面や機能面を高めることで、安全でおいしい給食の供給を可能にした。また、子どもたちが楽しみながら見学や体験、食事などができる施設を併設。五感を通して食について学び、考える機会を設けることで、地域コミュニティへの貢献も図っている。

公営住宅日の出団地

［浜頓別町］

中川町幼児センター

［中川町］ ●プロポーザル最優秀賞

2017

公営住宅北栄団地

［枝幸町］

福祉交流拠点地域複合施設「ときわ」

［音威子府村］

サービス付き高齢者住宅とデイサービスセンターなどを併設した複合施設。居住施設はプライベートな空間を保ちながら、安心して暮らせるように、細部にまでユニバーサルデザインを取り入れた。1階には窓が広く、明るい雰囲気のデイサービスセンターと、幅広い世代の住民が集うことをイメージした地域コミュニティスペースを配置。地域交流の中核施設として、木を生かした温もりのある空間や周辺環境と調和した外観デザインも特長になっている。

パレットヒルズ管理棟

［鷹栖町］

礼文町須古頓地区防災避難所

［礼文町］

旭川デザインセンターショールーム改修

［旭川家具協同組合］

大きな倉庫としてのベースがあり、ヒューマンスケールに合わせて設計のアプローチを考えた。エントランスまでの長いスロープは、ユニバーサルデザインを意識しつつ、来場者に気持ちを切り替えてもらう狙いがある。1階ホールから2階展示スペースへの導線を促すため、象徴的な螺旋階段を導入した。大きなガラスを用いることにより、空間的に温熱環境にも配慮している。

Visions beyond existing concepts

未来像－既存の概念を超えて

爽やかな風に身を任せて公園の中を歩いていた。
ふと見上げてみると、鮮やかに色づいた紅葉が頭上に広がっている。
気づけば足元にも赤や黄の葉が敷き詰められている。
小さな広場では品の良い老婦人が落ち葉を掃き集めていた。
少し近づいてみると、ハートのかたちを描いているようだ。
子どもたちが興味深げに近寄って彼女に何か話しかけている。
彼女は楽しげに会話を交わしながら、優しい微笑みを浮かべていた。
その光景を見ながら、いつしか私も笑顔になっていた。

私は、旭川の大工の息子に生まれました。幼いころは、長屋暮らしで、隣近所との結びつきが強い環境で育ちました。自転車が大好きで、大人用の自転車を三角乗りして走り回っていたことを、今でも懐かしく覚えています。

私が通っていた東五条小学校は、レンガ造りのはしりで、ペチカのある洒落たデザインの建物でした。昭和初期から50年代にかけて活躍した建築家の岡田鴻記氏の設計で、大きな内庭が印象的なロの字型の校舎でした。建物に囲まれた内庭は、木々や花々がきれいに植えられていて、屋外なのにまるで屋内にあるような空間の心地よさを感じて育ちました。

小学生の頃は、新聞配達のアルバイトをしていました。自分で働いて貯めたお金で初めて買ったのが携帯用のラジオでした。私の母は50年以上経った今でも、その古いラジオを大事に取っておいてくれています。記憶に残る品物や思い出を大切にしてくれていることに感謝しています。

私は父の大工仕事も時々手伝っていました。足場や屋根の上での作業は怖かったし、体力的にキツイ思いもしましたが、柱が建ち、屋根ができ、さまざまな空間が出来上がっていく様子を見るのが好きでした。父は几帳面な性格で、納得がいくまで仕事をしないと気が済まない、頑固な職人でした。手間を掛け、丁寧に家を造り、喜んでもらうことを生きがいとして働く背中を見せてくれた父に感謝しています。

私が中学生の頃、仕事場を兼ねた家が建ち、その自宅の小屋裏に造ってもらった狭い部屋をとても気に入っていました。こぢんまりとした天井の低い空間でしたが、私にとっては自分だけの大切な場所でした。

小学校の内庭や自宅の小屋裏部屋、家づくりの始まりとなる柱と梁で囲まれただけの空間……。心地良い居場所を感じ、考えるようになった原点がここにあります。

高校時代は部活動のバドミントン一色でした。当たり前のことですがスポーツは勝ち負けの世界。「人よりうまくなりたい。勝つために強くなりたい」という思いで、辛い練習にも真面目に打ち込みました。努力が実り、先輩を負かした試合は今でも鮮明に覚えています。強いものに立ち向かい、自分やパートナーを信じ、勝利した時の感動や満足感は二度と味わうことのできない貴重な経験であり、私の大切な財産の一つになっています。全道選手権でダブルス優勝、国体の北海道予選でシングルのベスト４に入賞したのがバドミントン部での成績でした。それなりに満足のいく結果でしたが、「上には上がいる」ということ、そしてスポーツ選手としての自分の限界も知りました。

将来は建築関係の仕事に就きたいと考えていた私は、北海道東海大学の芸術工学部に進学しました。大学ではバドミントンの同好会をつくって、仲間と汗を流しました。そのときに顧問をお願いしたのが、この本にご登場いただいた橋場光先生でした。

大学を出て建築設計事務所に就職してからは、夜遅くまで図面を描く毎日が続きました。当時は、仕事は見て覚えろという時代。新人を育てるような環境ではありませんでした。そんな私の助けになったのが、大工の息子だったことでした。父の仕事を見て育ったため、寸法の収まり具合などをイメージできたのが幸いでした。

「早く一人前になりたい」という夢に支えられた修行時代。私は、勤めを続けながら他の事務所を訪ねては「仕事を手伝わせてほしい」とお願いして回っていました。その活動中、IA研究所設立に参加した細野満則さんに偶然出会う機会がありました。細野さんは建築設計事務所で一緒に働いた先輩で、その時細野さんといた当時の常務、長原一幸さんにも顔を覚えてもらいました。それが縁で、IA研究所に誘っていただいたのです。28歳の時のことです。

IA研究所に入社して2年目にボーナスをもらうと、年末年始の休暇を利用して初めての一人旅に出かけました。行き先は世界の中心ともいわれるアメリカ･ニューヨーク。世界を見てみたい、違う文化を肌で感じてみたいという衝動に駆られて憧れの地に向かいました。

多様な国籍の人たちが集まる街は、年越しのカウントダウンの興奮に包まれていました。私はアメリカ国旗がデザインされたパーティーハットとピロピロ笛を買い、群衆の興奮をよそ目に、少し緊張しながらタイムズスクエアを1人で歩きました。そのときに感じたこと、経験したことすべてが、今の私につながっています。アメリカンドリームのようなことは起こらなくても、「頑張れば必ず評価される」と信じて、自分ができることを精一杯やってきました。

それから30年近い年月が流れ、再びアメリカを訪れる機会がありました。当時、摩天楼の一角を築いていたワールドトレードセンタービルの姿はなく、代わりに跡地にはグランド･ゼロとしてメモリアルパークがつくられ、ワンワールドトレードセンタービルをはじめとする再開発が進められていました。2001年9月11日に起きたアメリカ同時多発テロ。ワールドトレードセンタービルに航空機が衝突するテレビ映像は、まるで映画のようでした。「こんなことが本当に起こるのか」と思いながら、崩壊するビルを呆然と観ていた記憶が蘇えりました。そして、その悲劇を乗り越えていく姿に、悲しみや苦しみ、さまざまな思いを持った人たちが力強く生きている証がここにあることを感じました。かつて世界の中心といわれた場所は、前に進もうとするたくましいエネルギーにあふれていました。再開発によって生まれ変わろうとしている街並みを見ながら、人が創り出す建築の力強さを改めて実感していました。

30代、40代の頃の私は、徹夜も厭わずひたすら仕事に没頭しました。多忙を極めるなか、1988年に「旭川住宅設計競技」というコンペに応募し、長原さんの作品が優秀賞に、

私の作品は特選に選ばれました。その後、積極的にコンペやプロポーザルに参加し、数多くの最優秀賞をいただくことができました。粘り強く、最後まであきらめない姿勢で取り組む長原さんと細野さんの成果であり、IA研究所の草創期を支えてくれました。

以来、IA研究所は多くの作品を手掛けてきました。ここ数年で最も魅力的な仕事の一つとして挑戦したのが、上川町の「大雪森のガーデン」に建築されるレストランのプロポーザルでした。「この仕事はどうしても取りたい」という一心で、真冬にもかかわらず建設予定地に向かいましたが、積雪のため途中で引き返しました。春になってようやくその地に立てたとき、新緑と雪をまとった大雪山連峰の壮大なパノラマに感動し、美しい景色を多くの人と共有するプロジェクトへの思いを強くしました。また、当初開業予定だった東京のレストランまで足を運んだりもしました。そのときは予約が取れず、食事はできませんでしたが、プロポーザルの場ではそうしたエピソードを交えて熱意を伝えました。その思いが通じたのか、私たちのプランを選んでいただきました。私が代表になって初めて特定されたプロポーザルであり、思い出深い作品の一つです。その後も「あさひかわ北彩都ガーデン」のガーデンセンターや美瑛町の「丘のまち郷土学館美宙」など、素晴らしい仕事と出合うことができました。大学時代に橋場先生から言われた「志を高く持て」という言葉を胸に、精一杯取り組んできた結果が、コンペやプロポーザルでの評価につながっているのだと考えています。

私がIA研究所の代表取締役に就任して7年の歳月が経ちました。その間にはさまざまな出来事がありましたが、何よりも忘れられないのが2011年3月11日のことです。その日は東日本大震災が発生した日であり、また奇しくも私が代表取締役となって最初の株主総会を開催した日でもありました。被災地では、家族や住まい、長年引き継いできた街並みや文化を失い、情報や物資が届かないという混乱の中にありながらも、互いに協力し、支え合う人々の姿がありました。日本人の奥ゆかしさや苦難にあっても秩序を保とうとする生き方は海外にも発信され、大きな感動を呼びました。そうした人々の優しさや献身的な姿は、これからの未来を築く上で重要な手がかりの一つになるのではないかと思っています。

近年は「シェアの時代」とも言われています。車や住宅などの財産を個人が所有して使うのではなく、みんなで共有して使う。例えばシェアハウスは、シェアをしながら生活する方がたくさんの楽しみがある、という暮らし方が共感を集めています。それは、より多くのお金を持つことに価値を求めた時代からの脱却であり、成熟した社会へとつながっていることを示しています。必要なのはたくさんのお金ではなく、人々とつながり、たくさん楽しむことができるという喜び。そうした新しい価値観が新しいアイデアを生み、新しい仕事を生み出していくのだと考えています。

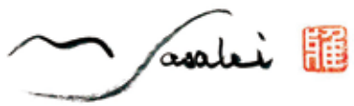
建築という仕事が私に向いているのか、私の人生として良かったのかは、この年になってもわかりません。挫折もたくさんしました。悔しい思いもしました。しかし、この仕事をしているからこその喜びややりがいもたくさん得ることができました。苦しみながらも向上心を持って努力を続けていれば、いつか楽しいことがあることも知りました。

やがて「楽しむこと」が仕事になる時代がやってくると、私は感じています。しかし、仕事や目標を達成するために学び、経験を積むことの大切さや意義は、これから先も変わることはありません。失敗を恐れず、自らが決めた道を存分に楽しむことができれば、それが社会に貢献することにつながっていくはず。誠意を持って取り組み続ければ、きっと社会が仲間が友人が認めて手を差し伸べてくれるでしょう。

“自分らしい”生き方は人それぞれです。今は自分に自信が持てなくても心配することはないのです。どんな人にも社会を支える役割＝仕事があり、仕事を通して人々や社会の役に立ち、喜んでもらうことができれば、きっと自分の人生も幸せで有意義なものにできるはずです。自分の気持ちと正直に向き合い、一歩を踏み出す勇気さえあれば、その扉の先に既存の概念を超えた素晴らしい未来が待っていると私は信じています。

どこからか心地よい音が響いてきた。
私はもっとよく聞こうと、目を閉じて耳を傾けた。
子どもたちの声、風が木々を揺らす音、落ち葉を踏む小さな足音……。
目をつぶっていても感じられる世界の豊かさに気づき、
ひととき自分が幸せであることをかみしめた。
少し重く冷たい空気は、秋の深まりを感じるにおいがする。
やがて北海道らしさを実感できる冬がやってくる。
そして、その先には新緑に包まれたすがすがしい春が訪れ、また大好きな夏がやってくる。
さまざまな思いを巡らせながら、多くの人たちに支えられていることのありがたさを感じ、
心の中は感謝の気持ちで満たされていった。

株式会社IA研究所 代表取締役　佐々木 雅敏



謝 辞

1986年に株式会社IA研究所が設立されてから31年の月日が流れました。その間、多くの方々に支えられてIA研究所は成長してきました。一つ一つの歩みは小さくとも、誠実にものづくりを続けてきたことで、後世に引き継がれる作品を手掛けることもできました。これも皆さまの温かなご指導やご支援のおかげと深く感謝申し上げます。

この度、30周年を迎えた記念に、本書『ともに考えるシゴト』を企画し、2年をかけて制作、発行いたしました。時代が移り変わり、これまでの価値観が大きく揺らいでいる今だからこそ、仕事の意義を見つめ直し、働く楽しさや喜びを知ってもらいたい、という思いを込めております。年代や職業を超えて、より多くの方にお読みいただき、何かを感じとっていただければ幸いです。

最後になりましたが、本書の制作にあたりご協力いただいた皆さまに心から御礼申し上げます。

株式会社IA研究所

株式会社IA研究所30周年記念出版

ともに考えるシゴト

2017年11月

発　　行　　株式会社IA研究所
旭川市永山6条6丁目4-14
電話:0166-47-5780

企画・編集　　株式会社IA研究所

取材・制作　　株式会社みんなのことば舎

株式会社IA研究所 沿革

1986年 8月　株式会社アイエイ研究所　設立
旭川市永山町6丁目1番地76
（株式会社インテリアセンター内）
代表取締役　長原實　就任

1991年 2月　代表取締役　長原一幸　就任

1997年12月　旭川市永山6条6丁目4番14号に移転
（社屋新築）

2002年 3月　代表取締役　細野満則　就任

2010年 3月　代表取締役　佐々木雅敏　就任（現任）

私たちのPolicy

時間の経過とともに
成熟する建築をデザインする

さまざまな背景とともに
人と人とがつながる空間をイメージする

新しい発想と価値観を持って
前向きにチャレンジする

IA研究所 30周年記念出版

株式会社 IA研究所
INSTITUTE OF INTERIOR ARCHITECTURE INC.